Meets HOKKAIDO

～まだ見ぬ北海道の物語～

事業報告書

札幌演劇シーズン実行委員会

Meets HOKKAIDO
～まだ見ぬ北海道の物語～

事業報告書

札幌演劇シーズン実行委員会

目次

事業概略……4

ラジオドラマ〈帯広篇〉

『九郎兵衛（くろうべい）のスットーンな一生』……6

街の中、十勝石が見てきた「時間」前田透……7

ラジオドラマ「九郎兵衛のスットーンな一生」を制作して……8
松崎霜樹

『九郎兵衛（くろうべい）のスットーンな一生』脚本……10

ラジオドラマ〈室蘭篇〉

『クジラの腹の中』……34

「室蘭のおと」米沢春花……35

「室蘭をおとで伝える」沼田勇也……36

『クジラの腹の中』脚本……38

ラジオドラマ〈恵庭篇〉

『過ぎゆくものたち』……74

「花開いてゆく街」常本亜実……75

ラジオドラマ制作で感じた地域コミュニティの力
三浦真吾……76

『過ぎゆくものたち』脚本……78

演劇作品〈鷹栖篇〉

『ヒヅメとイナナキと不思議な沼』……104

「なにもないけど、なんでもある」戸澤亮……105

「鷹栖のそこぢからは時空を越える」礒野聡美……106

『ヒヅメとイナナキと不思議な沼』脚本……110

Meets HOKKAIDO
～まだ見ぬ北海道の物語～

今は使われなくなりましたが、北海道の人たちは少し前まで津軽海峡以南の土地を「内地」と呼んでいました。きっと、自分たちは「外地」に暮らしているという意識があったのでしょう。思えば北海道の近代の歴史は、常に「内地」に憧れ、「内地」を目指し、悲しいくらい必死になって「内地」に近づこう、追いつこうとしてきた歴史だったのではないでしょうか。その結果、北海道は何を得て、何を失ったのでしょう。私たちは、北の地にわずか150年で近代都市を創り上げた先人たちの労苦に思いを寄せながらも、一方ではそろそろ、「内地」を目指すことに一度区切りをつけ、自分たちの足元を掘り返してみる、そんな作業をはじめなければならない時期を迎えているのかもしれません。

2023年度のJAPAN LIVE YELL project in HOKKAIDOは「札幌と地域を舞台芸術でつなぐ」ことを基本テーマとして事業を展開しました。その中の企画のひとつが「Meets HOKKAIDO～まだ見ぬ北海道の物語～」です。札幌の若手演劇人が地域のコミュニティFM局や地域おこし協力隊と連携しながら、地域で取材を重ね、地域の「物語」を収集し、演劇作品やラジオドラマを創作しました。それは、自分たちの足元を自分たちの手で掘り返してみる作業とも言えます。

派遣先は帯広市、室蘭市、恵庭市、鷹栖町。奇しくも2023年3月、アメリカのメジャーリーグで活躍する日本の若者が「憧れるのはやめましょう」と言って話題を集めました。それから3か月後、派遣先のまちに向かった札幌しか知らない若者たちは、地域の中で、何を感じ、何を掘り起こすことができたのでしょう。本報告書では彼らが創作した脚本と戯曲、さらには若手演劇人とご支援いただいた地域の方々の声を収録しています。

帯広市、室蘭市、恵庭市で制作したラジオドラマは、JAPAN LIVE YELL project in HOKKAIDO 2023の公式サイトでお聞きいただけます。収録した脚本と併せてお楽しみいただければ幸いです。

●JAPAN LIVE YELL project in HOKKAIDO 2023の公式サイト
https://s-e-season.com/jlyp2023/program/meetsh/

●事業期間／2023年6月～2024年1月
●派　遣　先／帯広市、室蘭市、恵庭市、鷹栖町
●実施内容／札幌の若手演劇人が地域のコミュニティFM局やまちおこし協力隊と連携しながら、地域で取材を重ね、派遣先の地域を舞台とした劇作品やラジオドラマを創作。
また、若手演劇人と地域の方々が完成した作品を通して、それぞれのまちについて語り合う対話の機会を設けました。実施状況は以下のとおり。

・帯広　2023年12月10日（日）14:00～15:45／演研・茶館（帯広市大通南6丁目14-1）
・鷹栖　2024年1月20日（土）15:00～15:30（公演終了後実施）／たかすメロディーホール（鷹栖町南2条4丁目1-1）
・恵庭　2024年1月26日（金）18：00～20：00／島松多目的スペース JUNCTION（恵庭市島松寿町1丁目28-10）
・室蘭　2024年1月28日（日）13:30～15:30／室蘭中小企業センター会議室（室蘭市東町4丁目29-1）

●協　　力／FM WING（株式会社おびひろ市民ラジオ）、
FMびゅー（室蘭まちづくり放送株式会社）、
e-niwa（株式会社あいコミ）、鷹栖町

■ 参加アーティスト ■

帯広市　前田透（劇団・木製ボイジャー14号）

●プロフィール
演出家、劇作家、役者。
札幌市白石区生まれ白石区育ち。
「劇団・木製ボイジャー14号」の代表、演劇ユニット「ヒュー妄」のメンバー。
2017年頃からは劇中音楽の製作や提供も行なう。
学校や一般にむけての演劇・表現ワークショップの講師や、市内中学校にて演劇部の指導をしている。

室蘭市　米沢春花（劇団fireworks）

●プロフィール
高校の頃に観劇した舞台に感動、特に舞台装置に感銘を受けて舞台装置作りを始める。そこから、空間演出の面白さに気がつき、脚本・演出を始め、劇団fireworksを作る。
以降、劇団の本公演全ての脚本・演出・舞台装置を手がける。字は汚い。

鷹栖町　戸澤亮（フリー）

●プロフィール
1990年生まれ、札幌市出身。
美術系大学進学後、アートの可能性を探るうち芸能の世界に魅力を感じる。
オーディションを経て事務所所属後、数々の演劇作品に俳優として出演するほか、映画・ラジオ・ドラマ・CMなどに出演。道内外への客演経験も多数。
2020年TGR さっぽろアートステージ2020にて俳優賞受賞。
2021年1月、NEXTAGE第5回公演にて脚本・演出を担当。
同年3月に事務所を退所し、以後フリーとして俳優活動に取り組む傍ら、アートの可能性を模索し続けている。

恵庭市　常本亜実（札幌座）

●プロフィール
旭川生まれ札幌育ち。
北海道教育大学教育学部岩見沢校芸術文化コース卒業後、東京にて舞台や映画を中心に多数出演。2019年に札幌に戻り、札幌座に入団。札幌座研修生を経て、2020年に準座員、2021年10月1日より、札幌座員として俳優として多数の舞台に出演し活動をしている。2021年より脚本の勉強を始め、2023年より本格的に執筆活動を開始する。

ラジオドラマ〈帯広篇〉

『九郎兵衛（くろうべい）のスットーンな一生』

作／前田透（劇団・木製ボイジャー14号）

街の中、十勝石が見てきた「時間」

前田透（劇団・木製ボイジャー14号）

十勝の人は十勝愛がすごい、ということを最初の段階に聞きました。街中の様子を見ると地元展開されている店舗が幾つも。練成会グループが帯広練成会や十勝練成会、ではなく、「畜大練成会」なことも。他の地方では、旭川、や釧路、となっている。不思議です。「十勝モンロー主義」という言葉やモビライゼーション、という言葉も印象的でした。かなりの車社会。中札内からバスで帯広に行こうとした時、あるご婦人に会いました。ご婦人は免許も返納したのでバスで市内にお買い物に行くところでした。「帯広の方に色々集まっちゃっているからお買い物にはちょっと不便ね。」とのこと。帯広大谷高校の演劇部の子達に話を聞いた時も、車があればね、なんて話が。顧問の先生も「車があれば帯広・十勝はホントに暮らしやすい」と言っていました。私も車を持っていないので、ウイングさんの車で色々取材に行きました、とても快適だし、道すがらの景色も良かった。札幌に暮らす私は、自転車や地下鉄で大抵のところに行けてしまうのでさほど困らない。都市の規模感が違うのです。

今回取り上げた十勝石、も他では黒曜石と呼ばれていることが多いけども、十勝石、と呼ばれていることに大変惹かれました。ジャズシンガーのMOTOKOさんに藤丸の話を取材する際、十勝石の話なんですが、と伝えると「うちの畑で採れるよ」と言われて驚きました。後日実際に探し、石捨場にて5分前後で二つも見つけられました。いわく、年に1～2個見つかるかどうか、とのこと。

創作を通じて、年月が経って、形がなくなって変わっていってしまうこと、もの、について考えていました。帯広についてのニュースを調べ始めた時、ちょうど藤丸の閉店の時期でした。取材中には長崎屋も閉店。喪失ではあるけれども、代わりの何かに生まれ変わったり、出会ったりすることもある。その先に希望があるといいな、と思って九郎兵衛が割れて四郎兵衛と五郎兵衛になって、新たなものになり、新しい一生がスタートします。

十勝石は、今や日用品として使われることはおそらくないですが、かつてはこの土地に暮らしていた人々にとっての必需品であり、且つ、儀式的な存在でもあったりした。そうしたものがその土地で採れ、使われていました。幾つもの世界的な技術革新と、入植者との交易、支配の中で鉄鋼製品などが入り置き換わっていき、数多の混乱を経て今は今の暮らしがあります。人の歴史の相棒であった十勝石、それがこの土地にまだ眠っている、あるいは転がっていることは、少しスピリチュアルな話かもしれませんが、特別なことだと思います。歴史を感じる重要なアイテムです。

また、どの土地でも、河川を引き直したりすることはありますが、十勝川の治水作業は他の土地と比べても大規模に思えます。当然、川の水はずっと流れていくので同じ水が流れることはありませんし、特に十勝川は、時代とともに大きく形を変えていきましたし、これからもまだ変わるかも知れません。十勝石がその痕跡を残しながらかつて流れていた場所に存在していることが十勝開拓の歴史の残り香を放っているな、と考えています。

▲FMウイングの前に立つ前田さん

ラジオドラマ「九郎兵衛のスットーンな一生」を制作して

松崎霜樹（株式会社おびひろ市民ラジオFMウイング　スーパーバイザー・プロデューサー）

ラジオドラマは過去にも制作した経験があり、とまどうこともなく作業できた。最初の仕事は札幌からやってきた若き演劇人に地元愛あふれる方々を引き合わせることだった。他地域との文化や地域独特の歴史や課題を語れる人々の話がどのような作品につながるのか興味深く見守った。

そして、この度の「九郎兵衛のスットーンな一生」というラジオドラマに結実した。

サミュエル・ベケットや寺山修司などの戯曲家がラジオドラマを書いていたので「演劇」と「ラジオ」は親和性があると思っていた。前田氏は「音声による想像性」をかなり意識したのか「十勝石が話す」というファンタジーを発想してきたがまさに若い感性であると大いに刺激を受けた。

地方都市を真正面から題材にすると、ともすれば深刻な地域課題が柱になってしまい閉塞的なドラマが出来上がってしまうケースが多い。暗く重苦しいドラマでは地域を励ますことができない。「未来に光が差してくるようなドラマ」を求めるのは当然のことである。

さて、制作上の苦労話をひとつ。リスナー（聴取者）に「十勝石が話す」場面に「普通の人間が話す」ケースの場合、その状況を伝えることに多大なる工夫が必要となった。冒頭プロローグにおいて十勝石たちが語り部として登場、十勝石が物語の中心となって進行されていくことが説明されているのだが、舞台と違ってラジオは常に同じオーディエンス（観客）がそこに存在するわけではない。「十勝石が主人公」であることをその都度うまく説明しなければ聴いている人は混乱してしまう。ラジオは不特定多数が対象であるメディアであることの難しさを前田氏は相当苦労されたのではないか。

とはいえ、膨大の数の効果音を準備し、シーンごとに適切な音楽（一部地元音楽家の楽曲）を配置した結果、小気味のよいファンタジードラマに仕上がったと自負している。

また、弊局は十勝地方の「おびひろ市民ラジオ」という社名（FMウイングは愛称）の通り「市民参加型ラジオ」である。ゆえにキャスティングにはさほど苦労しなかった。地元劇団の関係者や学生はもとより飲食店経営者や介護士、雑誌編集者やリサイクルショップ店長など芸達者なパフォーマーによってこの度のドラマは出来上がった。どの参加者も心から演技を楽しんでいるように感じた。その姿は「閉塞感ばかりの地域社会であるがゆえに一時の非日常の創作活動に打ち込む」というものであり、地方都市にはこのような場がありがたかった。ご支援・ご協力いただいた方々には心からお礼申し上げたい。

最後になるが、本ドラマは「ある十勝石の一生」である。何故か地元ですら誰も意識すらしていなかった「十勝石」に目をつけた若きヨソモノ前田氏に心から敬意を表したい。

「十勝石なんて、ばっかじゃないの」の声も聞こえたが、昔から「バカ」と「ワカモノ」「ヨソモノ」の視点こそが地域を変える大きな刺激になるのだから。

▲リスナーさんとの交流会（写真左が松崎さん）

●ラジオドラマ帯広編

『九郎兵衛（くろうべい）のスットーンな一生』

脚本　前田　透（劇団・木製ボイジャー14号）

十勝石のナイフと首飾りが持ち主たちの人生に寄り添いながら、帯広・十勝の街の移り変わり、これからの街の未来図を描くファンタジーラジオドラマ。

【出演】

九郎兵衛……佐々木源市
曜子……万里慧
士幌の十勝石……大久保真
十勝石A……石崎万友佳
十勝石B……浦島崇
十勝石ではない十勝石……出田直正
四郎兵衛……田中沙季
五郎兵衛……佐藤拓也
百年記念館の十勝石……富永浩至
陽毬……島谷羽瑠姫
智也……鈴木優凛
その他の十勝石……鈴木伊織
店内放送……水上瑠里子
珠美……水上夕璃
怜未……池本心奏
学芸員……大和田努

【演出】

田中沙季（おびひろ市民ラジオFMウイング）

【協力】

帯広百年記念館
帯広北高等学校演劇部
劇団演研
帯広市立緑が丘小学校合唱部

【音楽】

加藤恵理奈「親和」
Amorphous「フォーレスト　ザ・ライフ」

▲主役の佐々木源市さん、万里慧さん

1

プロローグ

夏。士幌の道の駅の畑。
虫が鳴いている音。牛の鳴く音。

士幌の十勝石　「今日も見事な十勝晴れだ。」
十勝石A　「先生。私、畑と空以外の景色が見てみたいな。」
十勝石B　「おれらは十勝石。ずっと士幌の道の駅で転がってるだけだよ。」
十勝石A　「いつか子供がひょっと拾ってくれるかも！」
十勝石B　「投げられたり割られたりするのが目に見えてる。」
十勝石A　「割られるのだけは嫌！」
士幌の十勝石　「ああっ!!（大きな声）」
十勝石A　「どうしたんですか？」
士幌の十勝石　「古い知り合いに、十勝石のナイフのやつがいてね。」
十勝石B　「ナイフ、へえ。」
士幌の十勝石　「九郎兵衛って言うやつで。畑に転がっていたところを、ある男の子に拾われたんだ。丈夫な皮のケースに入れて首からぶら下げられ、毎日一緒だった。」
十勝石A　「うらやましい。」
士幌の十勝石　「そして、時は２０１１年、そこからヤツの一生は激変した！」
十勝石A　「２０１１年？」
十勝石B　「５０年前くらい？」
士幌の十勝石　「とにかく昔！始まりは持ち主の智也くん、高校２年の人生初デートの日！」

歌舞伎の幕開きの拍子木の音。

2

２０１１年。長崎屋。
ドアを開ける音、階段をドタドタと駆け上る音。人々の雑踏。

九郎兵衛　「ずいぶん走ったな！髪の毛ぐちゃぐちゃ！そんなんじゃ陽毬ちゃんに嫌われちまうぞ！」
智也の鼓動が少し大きく聞こえる。
九郎兵衛　「朝からうるさいなぁ。おれ、お前の心臓のすぐ近くにいるんだからね？」
どたどたと階段を駆け上がる音。さらに鼓動が大きくなる。
少し高音の、キーンとした石の波長の音。
九郎兵衛　「お、来た？！」
曜子　「走らないで！ちぎれちゃう！」
石の波長が重なり合い、共鳴し、キーン、キーン、キーン、と、反響する。
九郎兵衛　「まさか、長崎屋でお仲間に会うとは。」
曜子　「仲間？」
九郎兵衛　「同じ十勝石同士。」

曜子　「高貴な首飾りであるこのわたくしが、野蛮なナイフと?!」
九郎兵衛　「同じ山から噴火してきた仲じゃないか！」
曜子　「育ちがちがいますの！」
九郎兵衛　「お前、陽毬ちゃんの首飾り?」
曜子　「あなた、智也さんのナイフ?」
九郎兵衛　「そうお守りのな！」

鼓動、大きくなっていく。

九郎兵衛　「呑気にドキドキしてやがる！…ちょうどいい！あの首飾りの声も聞こえない！（いびきをかきはじめる）」

雑踏、喧騒、小さくなる。鼓動はやや大きいまま。九郎兵衛のいびきが聞こえる。

3

長崎屋のフードコート。
食事中の人々の声、食器の音。鼓動は聞こえなくなる。九郎兵衛のいびきは激しさを増す。

曜子　「ちょっと。」
九郎兵衛　「せっかく気持ちよく寝てたのに！」
曜子　「カレー、ついてない?」
九郎兵衛　「ついてない。」
曜子　「良かった〜！」

九郎兵衛　「ツバはついてるけど。」
曜子　「汚い！お話に夢中なのはいいけど…。」
九郎兵衛　「二人、盛り上がってんの。」
曜子　「本や写真のお話や、陽毬が書いた劇の脚本のことだとか。」
九郎兵衛　「気が合うんだな。」
曜子　「陽毬の書いた劇を気にいって誘ってくれたのね。」
九郎兵衛　「写真部の仕事そっちのけで劇に夢中になって。」
曜子　「ねぇ、あなた。」
九郎兵衛　「おれは九郎兵衛。数字の九。一郎二郎の郎。兵隊の兵に護衛の衛。」
曜子　「曜子。曜日の曜に子供の子。智也さんって、どういう方?」
九郎兵衛　「物静かで、地味で、あと写真部で、高校2年生、読書が好きだな。以上。そっちは?」
曜子　「小説が好き、演劇部、物静か。高校2年生。昨日陽毬のものになったばかりなのであまり存じませんが。」
九郎兵衛　「それまでは?」
曜子　「お母様と一緒。ひいひいお婆さまの頃から代々受け継がれてきた高貴なものなんですの。」
九郎兵衛　「（小声で）それで高慢なのか。」
曜子　「（咳払い）…昔はもっと特別な時に贈られてたのに。」
九郎兵衛　「首飾り事情も色々変わるワケだ。お二人さん、もうチューとかした?」
曜子　「まさか。話は盛り上がって落ち着いた頃ね。」
智也　「すごく綺麗だね。」

智也の鼓動大きくなる。

九郎兵衛　「急だな！」

曜子　「陽毬？心臓の音が大きくなってるけど？」
九郎兵衛　「いまの綺麗だね。ってのは曜子のことか。」
曜子　「（大きな声）九郎兵衛さん！わたくし、綺麗？」
九郎兵衛　「（大きな声）綺麗だよ！」
曜子　「（大きな声）褒めてくださるなんて、良いところあるじゃない！また会えるといいわね！」

走り去る音。

九郎兵衛　「（大きな声）そうだな！（普通の声で）曜子、我儘だけど、純粋。生意気な妹、って感じだな。
智也、早い内に次のお誘いしろよ、来月、カップルにピッタリのイベントがある！チャンスだぞー！」

4

２０１２年。夏。
十勝川花火大会。
花火の音が聞こえてくる。

曜子　「初々しい初デートからもう1年。こんなにおでかけしたのに。」
九郎兵衛　「一切の進展もない。」
曜子　「陽毬の進路希望、札幌だものね。」
九郎兵衛　「どうせ戻ってくるのに。」
曜子　「より広い世界を知りたいのよ。」
九郎兵衛　「十勝だって広いだろ。」
曜子　「若者には広すぎ、ここじゃ狭すぎるの。」

九郎兵衛　「帯広だけで考えるから。」
曜子　「家にいるだけじゃ、気づかなかったわ。」
九郎兵衛　「曜子、家では何してるの。」
曜子　「昔のことを思い出したり、とか。」
九郎兵衛　「昔のこと？」
曜子　「家族と一緒でしたの。」
九郎兵衛　「家族？」
曜子　「他の十勝石やまあるい石たちと繋がった首飾りで。」
九郎兵衛　「そりゃすごい。」
曜子　「陽毬たちとは違う言葉で喋ってたわ、あの頃。」
九郎兵衛　「アイヌ語か。」
曜子　「４００年前に生まれて、毎日お喋りしたり、人が踊っているのをみたり。」
九郎兵衛　「毎日一緒か。」
曜子　「森の中の川辺の集落。舟で川を渡ったな。」
九郎兵衛　「川が中心だったのか。」
曜子　「そして１００年ほど前に鉄道やこの川に橋ができ、人も増え、わたくしだけが貰われて離れ
離れに。」
九郎兵衛　「そうだったのか。」
曜子　「豊かになったけど、わたくしは寂しくなったわ。」
九郎兵衛　「もし智也たちが…いや、二人は18歳、この先何があるか。」
曜子　「九郎兵衛と一緒か。その時は、兄さん、って呼ぶわね。」
九郎兵衛　「兄妹か。でも歩ければ、ほんとの家族を探しに行くのにな！」
曜子　「傷がついちゃうわね。」

川の流れる音が聞こえる。
それに混じって、小さく、波長が聞こえている。

曜子　「割れたりしたら、捨てられて、この川辺の仲間たちみたいになるのかも。」
九郎兵衛　「人の手を離れりゃ、喋れなくなるかもな。」
曜子　「川に運ばれてやってきたけど、いまは流れに削られるのも怖い。」
九郎兵衛　「昔は違う形だったもんな。俺たちも。」
曜子　「川も。もっと畝ってたわ。」

十勝川の十勝石たちの声が聞こえてくる。

十勝川の十勝石　「くーてーたー。くーてーたー。」
九郎兵衛　「よく聞こえるな。仲間たちの声。なんて言ってるんだ。」
曜子　「わたしはここ。よ。」
九郎兵衛　「よくわかるな。」
曜子　「昔聞いてた言葉だもの。」
九郎兵衛　「アイヌの言葉。おれも言ってたのかな。」

大きな花火の音が連続して鳴る。花火もフィナーレのようだ。

九郎兵衛　「今日ももうすぐでお別れかな。」

川の流れる音と、十勝石たちの波長が聞こえている。そして、智也の鼓動が大きく聞こえてくる。

九郎兵衛　「（大きな声で）心臓の音がでかい！」
曜子　「（大きな声で）陽毬も！！」

智也の鼓動、大変大きくなる。

陽毬　「好きです、付き合ってください！」
智也　「好きです、付き合ってください！」

鼓動が花火の音と重なる、併せて歌舞伎の幕切れのような拍子木が聞こえる。

士幌の十勝石　「２０１２年夏。晴れて二人は交際を始めた！」
十勝石Ａ　「良かった！」
十勝石Ｂ　「二人の進路は？」
士幌の十勝石　「大学から二人は遠距離恋愛に。」
十勝石Ａ　「寂しい！」
士幌の十勝石　「とは言え、月に一度は会い、ほぼ毎日、携帯電話で繋がっていた。」
十勝石Ｂ　「九郎兵衛と曜子は会えなくて寂しそう。」
士幌の十勝石　「携帯の電波でおしゃべりはできていたらしい。」
十勝石Ｂ　「すっげ！」
士幌の十勝石　「だが、いつまでも、順風満帆とは行かなかった。二人が２０歳になった２０１４年秋、危機が訪れる！」

拍子木の威勢の良いカカっという音。

5

２０１４年。秋。
藤丸百貨店。
店内の雑踏、喧騒の音。レジの呼び出しのアナウンスの音。

曜子　「このシャンデリア、飾りが減った気がしない？」
九郎兵衛　「藤丸、久々だからわかんねえな。」
曜子　「でもお母さんのプレゼントが見つかって良かったわ。」
九郎兵衛　「お、掘り出し物市、七階催事場だって。」
曜子　「十勝石の仲間がいたりするかな。」
陽毬　「掘り出し物市、行ってみようよ。」
智也　「うん。」
曜子　「やったわ。」

エレベータの音。

九郎兵衛　「石が沢山並んでるぞ！」
曜子　「あの音だ！」

十勝石の波長が聞こえてくるが、なんだかちょっと変。

十勝石じゃない十勝石　「ヘイ。ユートゥー？」
九郎兵衛　「なんだって？」

曜子　「私は曜子。首飾りの十勝石よ。」
十勝石じゃない十勝石　「アー、パードゥン？」
九郎兵衛　「黒曜石か。言葉が通じない。」
十勝石じゃない十勝石　「アイムフロームアメリカ！」
曜子　「何が違うの？」
九郎兵衛　「十勝生まれじゃない。」
曜子　「生まれが違っても、通じ合えるわよ。」
九郎兵衛　「智也と陽毬だって生まれは一緒だけど、住んでる場所が違って苦労してるだろ。な、智也？」
曜子　「それにしても、智也、ずっとぼけっとしてるわね。」
九郎兵衛　「昨日夜遅くまで友達と酒飲んでてさ！」
曜子　「二日酔い？！陽毬、悲しい顔してるわ。」
九郎兵衛　「やっぱりこいつ、女心がわかってないな。」
十勝石じゃない十勝石　「ワッチャネーム？」
九郎兵衛　「お前も空気が読めないやつだな。」
十勝石じゃない十勝石　「アイムハッピートゥーシーユー！バイ！！（遠くなっていく）」

歩いている音。

九郎兵衛　「おれたちは仲良くいれて良かったな曜子。曜子？」
曜子　「（大きな声）陽毬の心臓の音が。」
九郎兵衛　「（大きな声）どうした？」
曜子　「（大きな声）泣き出しそう。」
九郎兵衛　「（大きな声）智也、なんか言ったか？」
曜子　「（大きな声）むしろ、全然お話してませんの！」

陽毬　「もう帰る！」
曜子　「（大きな声）陽毬！（走り去る音）」

6

拍子木のカカっという短い音が威勢よくなる。

士幌の十勝石　「その事件から半年後！二人はちょっとギクシャクしたままこの士幌の道の駅へやってきた。」
十勝石A　「よかった！別れたりはしなかったのね！」
士幌の十勝石　「これは２０１５年。二人が大学３年生の春の話。」

再び拍子木のカカっと言う音。

２０１５年。春。
士幌の道の駅。

士幌の十勝石　「一度割れた石は、もとの石に戻らない。それはもう別のものだ。」
曜子　「それは、そうですわね。」
士幌の十勝石　「だが！それは、一つの石が割れたら、の話。恋人というのは、それぞれ石と石。心配することはない。」
九郎兵衛　「人の恋路を見届けるのは初めてで。」
士幌の十勝石　「大きい喧嘩もそれくらいでしょ。」
九郎兵衛　「車で遠出するたび、小さいのは。」
士幌との十勝石　「ほぼ毎回ってことか。」

曜子　「新しい火種もありまして。」
士幌の十勝石　「見守ってあげなさいよ。我々十勝石にできるのは、それなんだから。」
九郎兵衛　「就職活動が始まるんです。」
士幌の十勝石　「だいたい読めてきたぞ。」
曜子　「札幌で働きたい、って。陽毬。」
陽毬　「向こうは、何でも近くにあるしさ。」
智也　「十勝の自然や食べ物には勝てないよ。」
陽毬　「それだけじゃさ。」
九郎兵衛　「どうせ戻ってくる。」
士幌の十勝石　「いつどこにいるかなんてわからない。君たちもそうでしょ。」
曜子　「ですね。わたくしも家族と繋がった首飾りでしたから。」

モー、と牛が鳴く。
再び、カカっと、拍子木の威勢の良い音。

士幌の十勝石　「と話す曜子の目は、どこか遠くを見ていた。」
十勝石A　「二人はその後どうなるんです？」
士幌の十勝石　「陽毬は札幌、智也は十勝で働く。」
十勝石A　「皆出てっちゃうなぁ。」
士幌の十勝石　「が！1年足らずで陽毬は戻ってきた！」
十勝石B　「ええ！」
士幌の十勝石　「仕事が合わず、退職届を叩きつけた！」
十勝石B　「思い切った！」
士幌の十勝石　「陽毬は新しい職に就くが、互いに忙しくて会えない！今までとあまり変わらない！」

十勝石A　「つらい！」
士幌の十勝石　「会いたい！会えない！気持ちも交錯、時にぶつかる！」
十勝石B　「どうなるんですか！」
士幌の十勝石　「25歳!!ドライブ帰りの車の中！」
陽毬・智也　「そろそろ結婚しよっか。」
曜子・九郎兵衛　「また同時に言った！」
十勝石A　「わお！」
士幌の十勝石　「晴れて二人は夫婦になり、九郎兵衛と曜子も、一緒に！」
十勝石A　「曜子も新しく家族ができた！めでたしね。」
十勝石B　「でもこれじゃ、たまに聞くカップルの馴れ初め話ですよ。」
士幌の十勝石　「翌２０１９年。珠未という女の子が生まれ、すくすく育つ。が、２０２３年春、九郎兵衛の一生を揺るがす出来事が起きる！」

幕引きの拍子木の音。

7

２０２３年。春。
智也と陽毬の家。
家のドアが開く音。小さな女の子が笑いながらドタドタと走り回っている音。

曜子　「おかえり、兄さん。ご機嫌ね、珠未。」
九郎兵衛　「新しいお洋服とおもちゃ買ってもらってさ。」
曜子　「藤丸？」

九郎兵衛　「イオン。」
曜子　「先月閉店したんだった。」
九郎兵衛　「寂しくなる。」
曜子　「街も変わってくのね。」
九郎兵衛　「すぐ活気が良くなる！」

九郎兵衛をベッドに放り投げ、ドサっと落ちる音。ドアがバタンと閉まる。

九郎兵衛　「放り投げるなよ智也！皮袋から出ちゃっただろ！街が寂しくなっても珠未は明るい未来だ。」
曜子　「わたくしも久しぶりにお出かけしたいわ。」
九郎兵衛　「曜子は特別な時につける、十勝石の首飾りだから。」
曜子　「前はずっと一緒だったのに。」

ドタドタと走る音。ドアが閉まる音。

九郎兵衛　「珠未。お母さんは。」
珠未　「ない。あそぼ！」
曜子　「お父さんも？」
珠未　「ない。くろべあそぼ！」
九郎兵衛　「もういっぱい遊んだでしょ。」
珠未　「もっともっと！」
九郎兵衛　「でも、俺、むき身だから。」
珠未　「まっくろくろべかっこいい！」
九郎兵衛　「（照れている）困ったなあ。」

曜子　「怪我しないといいけど。」
九郎兵衛　「智也――！陽毬――！」
珠未　「くろべ！やっぱり硬い！」
九郎兵衛　「手、切っちゃうぞ――！」
珠未　「（楽しそうに笑う。）」
曜子　「握っちゃダメ！」

少しの静寂ののち、珠未が大きく泣き喚く声。智也と陽毬が廊下を走る音。バン、とドアを開ける音。

九郎兵衛　「智也！」
曜子　「大丈夫？」
九郎兵衛　「珠未、手、怪我しちゃった…。」
曜子　「大変！」
陽毬　「大事なものならそんな適当にしちゃダメじゃん！」
智也　「お前もちゃんと見てないから！」
九郎兵衛　「ケンカしちゃった。おれを叩き割ってくれ！」
曜子　「そんなこと言わないで！」
智也　「わかった、なんとかする…。」
九郎兵衛　「俺、捨てられたりするかな。曜子、元気でな。」
曜子　「（声が遠のき、聞こえづらい）兄さん！兄さん！」
九郎兵衛　「箱の中だ。こんなお別れか。曜子。（眠る）んごー、んごー。」

九郎兵衛、いびきをかいて眠る。
少しして、十勝石たちの波長が聞こえてくる。

九郎兵衛　「ああ、随分寝ちまった。懐かしいな。くーてーたー…いっぱい聞こえてくる。…仲間たちがたくさんだ。ん、建物の中っぽい？なんちゃら記念館？知らない男だ。こいつに貰われるのか。智也、ありがとうな。陽子のことを（トントンと、九郎兵衛を軽く叩く音。）なんだ、叩かないでくれ！割れるだろ！おっと、急に持ち上げるな！眩しいから虫眼鏡でみるな！」

コトっと、九郎兵衛を机の上に置く音がする。

学芸員　「これは最近加工されたモノですね。歴史的な価値はないので、お持ち帰りください。」
九郎兵衛　「ん？」

十勝石たちの波長が大きく聞こえてくる。

曜子　「兄さん！もう会えないのかと。」
九郎兵衛　「おれもだよ。」
曜子　「記念館に寄贈することになって。」
九郎兵衛　「寄贈？」
曜子　「十勝石のナイフは価値があるからでしょ。」
九郎兵衛　「ないのでお返しします、ってさ。」
曜子　「じゃあ、兄さんは、ただの十勝石のナイフ？」
九郎兵衛　「昔の記憶ぜんぜんねえからな！」
曜子　「（突然笑い出す。）また一緒にいられるのね！」
九郎兵衛　「多分、箱の中だよ。」
曜子　「そこにいる、ってことがわかれば。この、くーてーたー、みたいに。」

ひときわ大きな十勝石の波長が聞こえる。

曜子　「わ、あの十勝石。」

九郎兵衛　「でっかい。」

百年記念館の十勝石「（ゆっくりと喋る）しゃべれるの。」

九郎兵衛　「どうも。」

百年記念館の十勝石「きみ、どうしてそとにでてるの。」

曜子　「わたくしは陽毬の首飾りです。」

百年記念館の十勝石「あそこの子たちとそっくりだ。」

曜子　「え？！」

九郎兵衛　「曜子そっくりって…？」

百年記念館の十勝石「みんながいっていたのは、きみか。」

曜子　「うそ。」

音や速さが異なる石の波長。くーてーたーが聞こえてくる。合唱のよう。

士幌の十勝石　「曜子は、１００年ぶりに、自分の家族と再会することができた。３００年一緒に暮らした家族と。だが、九郎兵衛は物置の箱の中に仕舞われ、眠っていた。月日は流れ、２０５５年。彼は長い眠りから目覚めた。その日が、彼の最後の日。」

8

２０５５年。夏。

陽毬、智也の家。

ガサゴソという音。草木が揺れる音。

九郎兵衛　「眩しい。智也か？老けたなあ、すっかり白髪。おい大事に持て！」

小さい女の子の声がする。

玲美　「石だ。黒い。」

九郎兵衛　「だれ、きみ。」

玲美　「れいみです」

九郎兵衛　「珠未の妹？にしては、智也も老けてる。」

玲美　「んん？」

九郎兵衛　「このひと、おじいちゃん？」

玲美　「そうです！」

九郎兵衛　「そんなに寝てたか。…おれは九郎兵衛。十勝石のナイフ！」

玲美　「九郎兵衛！」

智也　「名前知ってるの？」

九郎兵衛　「お前だって、昔はおれとおしゃべりしてたろう。れいみ、もってくれ。皮の保護ケースつき！怪我なんてしないぞ～！」

玲美。土の上をはしる音。ナイフが勢いよく風を切る音。

九郎兵衛　「寝起きだから、手加減してね。」

玲美　「えい！」
九郎兵衛　「意外と割れやすいからな！」
玲美　「てき発見！」
九郎兵衛　「それ、レンガ！」
玲美　「勝負！」
九郎兵衛　「わ、わーーーーーーー！！！！」

衝撃音、九郎兵衛が割れる音がする。

九郎兵衛　「あっ。」
玲美　「負けちゃった。」
九郎兵衛　「意識が遠のいていく…死ぬって、こんな感じか。智也の孫の顔を見れて、良かった。」

九郎兵衛の割れた破片、四郎兵衛と五郎兵衛に分かれて復活する、が、当事者たちは気がついていない。

四郎兵衛・五郎兵衛　「俺は、振り返ると、」
四郎兵衛　「なんでもない一生だったなあ。」
五郎兵衛　「いい一生だっただろ。」
四郎兵衛・五郎兵衛　「おれがもうひとつ？」
四郎兵衛　「だれだ？」
五郎兵衛　「お前こそ。」
曜子　「（遠くから）兄さん！？いるの？！」
四郎兵衛・五郎兵衛　「曜子か！」
曜子　「九郎兵衛兄さんがふたつに別れた？」

四郎兵衛　「おれは、四郎兵衛。」
五郎兵衛　「おれは、五郎兵衛。」
玲美　「半分こ！すごい！」
五郎兵衛　「おれの方がでかいな。」
四郎兵衛　「ほんのちょっとな。」
曜子　「どういうこと？」
玲美　「割れちゃったの。」
曜子　「割れちゃったらこうなるんだ。」
四郎兵衛　「びっくりだよ。」
玲美　「ママ！これ見て！」
四郎兵衛　「珠未！大人になったな～！」
五郎兵衛　「一緒にいるのか。」
曜子　「10歳からずっと。」
四郎兵衛　「今は何歳？」
曜子　「35歳。」
五郎兵衛　「随分眠ってたんだなあ」
曜子　「話したいことが沢山よ！でもそろそろ帰る時間で。」
四郎兵衛　「久しぶりに会えて、本当によかった。」
五郎兵衛　「元気してたか？」
曜子　「来月また会えるよ。玲美のお誕生会だから。」
四郎兵衛　「おれたち、また箱の中だよ。」
五郎兵衛　「ついに捨てられちまうかも！」
曜子　「そんな。」
四郎兵衛　「また会えるさ。会えなくても、ここら辺にいる。」

五郎兵衛「それが落ちてる。」
曜子「うん…。」
玲美「じいちゃん、おかあさん。」
四郎兵衛「またな、曜子。」
玲美「これほしいです。」
四郎兵衛・五郎兵衛・曜子「え？」
玲美「玲美、しろうべいとごろうべい、ほしいです。」
四郎兵衛「おれ、こんなだよ？」
五郎兵衛「割れたとことか危ない、おっと。」
五郎兵衛「智也！雑に掴むなよ！」
四郎兵衛「行っていいだろ。」
五郎兵衛「なんだ、泣いてんのか。」
四郎兵衛「たまにつけてくれたらよかったのに。」
智也「そうだよなあ。ごめんな。」
四郎兵衛・五郎兵衛「智也…！」
智也「行ってらっしゃい。」
四郎兵衛「じゃあな、智也。」
五郎兵衛「元気でな。」
智也「元気で。」

四郎兵衛、五郎兵衛、皮の入れ物に詰め込まれ、石と石がぶつかる音。

四郎兵衛「真っ暗。」
五郎兵衛「眠いな。」

四郎兵衛「けど、すごい振り回されてる。」
五郎兵衛「寝られたもんじゃない。」
曜子「わたくしね、ほぼ毎日、家族と一緒なの。」
五郎兵衛「新しい十勝石？」
曜子「珠未、記念館で働いてるの。」

歩いている中、くーてーたー、くーてーたー、と、十勝石の波長が聞こえる。

四郎兵衛「こんな近くに、十勝石…。」
曜子「沢山いるの。」
五郎兵衛「知らなかったなあ。」
曜子「うちにも沢山。」
四郎兵衛「それは珠未が？」
曜子「玲美も。」
玲美「みっけ！みっけ！またみっけ！」

走る音。

四郎兵衛「わーあ！（ヒューンと飛んでいく音。）」
曜子「四郎兵衛！」
五郎兵衛「飛んでっちゃった！」
四郎兵衛「（草っ原に着地する音。）玲美！ここだよ！」

歌舞伎の幕引きの拍子木の音。

9

エピローグ。士幌の道の駅。夏。虫の声。牛の声。

士幌の十勝石　「これまでが九郎兵衛の激動の一生。」

十勝石A　「そして、また新しく始まるのね。」

十勝石B　「同じ山から噴火して、今、ここにいる。どうなってくかな。」

十勝石A　「50年前の十勝か。」

十勝石B　「今とはずいぶん違うんだろうな。」

十勝石A　「どこが違うかな。」

十勝石B　「ここしか知らないしな。」

士幌の十勝石　「我々には一瞬の50年。」

十勝石A　「一瞬で変わるんでしょうね。」

十勝石B　「昔はゆっくり変わってた。」

十勝石A　「ほんとに昔なんて、水の底にいたし。」

十勝石B　「動物ももっとたくさんいて。」

十勝石A　「象ともおしゃべりした。」

十勝石B　「鹿とか、ナキウサギとか。」

十勝石A　「まだ、お喋りできるかな?」

十勝石B　「この辺りには来なくなっちゃったからな。」

十勝石A　「人や、車ばっかりだもんね。」

十勝石B　「(象の鳴き真似をする。)」

十勝石A　「象はもういないよ。(鹿の鳴き真似をする。)」

十勝石B　「やっぱり無理かあ。」

十勝石A　「(牛の鳴き真似をする。)」

十勝石A、B　「くー、てー、たー。くー、てー、たー。」

終わり。

「室蘭のおと」

米沢春花（劇団fireworks）

室蘭というまちは、朝日と夕日がみえるまちです。

工場夜景が綺麗で、自然も美しいのになんだかノスタルジーを感じるたまらんまちです。

今回の企画でFMびゅーの沼田さんを中心とした室蘭というまちが好きな人たちと出会うことができました。

沼田さんは、取材でたくさん場所に連れて行ってくれましたが、室蘭のどこにいってもその場所や道や建物ことなどを詳しく教えてくれました。

▲ラジオドラマにも登場するイタンキ浜

何の資料も見ていないのに、スラスラとその場所の由来や出来事を話していて話を聞きながら、内心は辞書みたいだと思っていました。

また、沼田さんの話はその場所や道や建物のことを聞いているのに、そこに住んでいる室蘭の人の顔が想像できました。

自分も室蘭のまちを通して、室蘭に住む人を表現したいと思いました。

また、この企画が決まる前に室蘭に実家のある友人に実家の作業場の物、いらない？と誘われ室蘭に遊びに来たことがありました。その友人は少し前に父親を亡くしていました。

そのために、父が使っていた作業場の物をいらないかと声をかけてくれたのです。

作業場の物を見たり、その友人のお母さんや、友人の話を聞いてその友人の「家族」のことをなんだか忘れられずにいました。

その大きな2つの出来事があって出来上がった作品が「クジラの腹の中」です。

父の残した音を頼りに、父の痕跡を探す物語です。

このラジオドラマを通して、室蘭に住む人の暖かさやまちの魅力が伝われば、いいなと思っています。本当にたくさんの方のお力をお借りしてできたラジオドラマです。

取材場所の方々はもちろん、今回オーディションで市民の方々に出演していただき限られてる時間の中で、完成に向けて尽力してくださいました。

出来上がったラジオを聞いて、友人の母は「お父さんじゃなかったけど、お父さんだった。涙が出た」と連絡が来たそうです。その感想はとても嬉しく、私は演劇を作っている理由を再認識しました。

▲日本製鉄北日本製鉄所を取材（写真左2人目が米沢さん）

また、普段中々見学することの出来ない刀鍛冶や工場の中に入ることができて、演劇をやっていなければ経験出来なかったことだとおもいました。

ありがとうございました。

ラジオドラマ〈室蘭篇〉

『クジラの腹の中』

作／米沢春花（劇団fireworks）

「室蘭をおとで伝える」

沼田勇也（室蘭まちづくり放送株式会社　FMびゅー　代表取締役社長）

脚本づくりのための取材や出演者のオーディションから収録編集と、ラジオドラマの制作に関わる全てのことが初めてで、大変貴重な機会をいただきありがとうございました。

作品にとって最重要ポイントである脚本が、当初のテーマから逸れることなく、しっかりと現地取材した内容を反映して作り上げていただいたことがとてもありがたかったです。

▲室蘭の隠れた人気スポット、室蘭水族館

成果としては、まず制作面において、地域文化を「おと」で残すという目的はしっかり達成できたと思います。さらに、この作品は地域の方たちに向けた出演者オーディションを行い作品作りから地域の方に関わる機会を用意出来たことも良かったと思います。また、この作品をラジオ放送することで、日々生活する中であたりまえの日常を文化として再確認できる大変すばらしい機会になりました。

地域内での放送を2回行うことでより多くの方の耳に届けることができて、聴いた方から「良かったよ」というメッセージもいただいています。

さらに全道コミュニティFMにも発信することで、「鉄のまち」とひとくくりにイメージされがちな室蘭の様々な顔に、気づいていただける機会にもつながったものと思います。

課題としては、皆さん多忙の中で完成期限も近い状況での制作となったなか、ドラマの脚本演出ともに素晴らしい作品を作り上げていただきましたが、脚本第一稿の時点で対面でしっかり打合せやすり合わせをする機会を用意して更なる内容充実を図れたらよかったと思いました。

また、取材時に収録した音源など本物の音にもっとこだわってみたかったです。オーディションから収録までの時間も短かったため、出演者が原稿を読み込んだり、それぞれがシーンをイメージして足を運んだりするような時間が用意出来なかったことも心残りではあります。

一つ一つのことに、もう少し時間をかけながら積み重ねられれば、あと一歩で何らかの賞をとれる作品になるのではとさえ思える、とても良い作品ができました。

本企画に多くの皆様のご協力をいただき素晴らしい作品を残すことができました。心より感謝申し上げます。

▲室蘭「クジラの腹の中」チームの皆さん

●ラジオドラマ室蘭篇

『クジラの腹の中』

脚本・監督　米沢春花（劇団fireworks）

室蘭の「音」×室蘭の「まちづくり」をコンセプトに音で繋ぐ、家族の思い出の短編集。

父を亡くした男が、父ののこした「音」を頼りに、父の室蘭での思い出を拾っていく。

【出演】

瑛太……遠藤洋平
ともか……泉野知花
瑛太の母……澤田郁子
瑛太の父……村田　博
こうき……坂口　賢
FMびゅーパーソナリティ……伊藤朱里
船長、店員役……中島明美
ナレーション役……上森喜真

【取材】

沼田勇也、星　康洋、沼田康子
橋本稚葉、遠藤奈津美、築田綾美

【制作協力】

日本製鉄（株）北日本製鉄所
（株）日本製鋼所M&E
スターマリン（株）、
室蘭民報みんなの水族館
（一社）室蘭観光協会
室蘭市民俗資料館とんてん館
ナニナニ製菓
室蘭VOX

【編　集】

田附　歩

【音　楽】

KENTO ♪テーマ曲「クジラの腹の中」

▲工場から聞こえてくるのは「エリーゼのために」

「シーン1　一本目」

音楽

ナレ：父が亡くなって、今日で丸2年。父の3回忌で札幌から実家の室蘭を訪れた。
季節は春。春と言っても桜の散ってしまった頃。
SE：家のドアの開ける音（引き戸）

瑛太　「ただいま。」
母　「あら、早かったんでない？」
瑛太　「高速使ったもの」
母　「お疲れさん。ETCカード？」
瑛太　「そう。」
母　「ハイテクだねー。」
瑛太　「あれ、ともかは？学校？」
母　「いや、部屋にいる。手、洗ってよ。」
瑛太　「はいはい。」
母　「瑛太、あんたなんか食べてきたの？ご飯あるよ。」
瑛太　「食べる。」
母　「昨日ね、漁師さんからカレイ分けてもらったんだわ。」
瑛太　「あら、いいね。」

ナレ：手を洗って居間に帰ると、妹のともかが居間のテレビ台で探し物をしている。

ともか　「あら、お兄ちゃん。いたの？」

瑛太　「今帰ったとこ。」
ともか　「あっそう。おかえり。ねー、お母さん、数珠ってどこ？」
母　「数珠は、お父さんの部屋の棚のとこ。」
ともか　「あっそうか。お坊さん何時に来るんだっけ？」
母　「14時。」
ともか　「うーん。買い物行くには微秒か。」
母　「なんか欲しいの？」
ともか　「お茶。」
母　「家にもあるしょや。」
ともか　「ジャスミン茶がいいの。ダイエットにいいんだって。」

ナレ：地元の大学に通う妹のともか。最近はダイエットにハマっているらしい。

母　「あっ瑛太、あんたお父さんにあいさつしてきな」
瑛太　「はーい。」

SE：チーン
ナレ：元々おしゃべりでよく笑う父は、ずいぶん寡黙になった。
遺影の写真がぎこちない顔をして遠くを見ている。

母　「さ、食べるなら食べちゃって。みんな来ちゃうから。」

ナレ：父に挨拶をした後に、居間に向かうと母が自分の昼ごはんの準備をしていた。

ともか「喪服は着た方がいいの？」
母「母さんだけ着ようかな。2人はいいわ。」
瑛太「おじさんもくるの？」
母「くるよ。でもみんな泊まらないで帰えるって。」

ナレ：そこから嵐みたいに親戚が来て、お坊さんが来て、お経とありがたいお話と、
お酒と線香の匂いと潮風が混じって3回忌が終わった。
相変わらず父はぎこちない顔だった。
その夜、

ともか「見て、お父さんの。携帯。」
瑛太「うわー、そうだ、ガラケーだ。」
ともか「懐かしいよね。操作忘れちゃった。」
瑛太「確か、何にも残ってなかったんだよね。」
ともか「そ、写真はひとつも撮ってなかった。」
母「お父さんは、こういう機械はからっきしだったから。」
ともか「そ、もしかしてメールの下書きとかになんか書き込んでないかなって思って2年ぶりに起動してみたんだけど。」
瑛太「よく電源ついたね。」
ともか「ねー。でも、何にもなかった。」
瑛太「もし、俺が死んでも携帯は見ないで捨てて欲しい。」
ともか「それが遺言？」
瑛太「あと、家のＰＣも叩き割ってくれ」
ともか「任せて。」

母「何馬鹿なこと言ってるの。」
瑛太「そういえばさ、父さんの遺影もっといいのなかったの？」
ともか「それ、私も思った。写真うつりすごく悪いよね。」
母「お父さん、写真苦手だったのよね。」
瑛太「笑顔の写真一枚もないの？」
ともか「ないのよ」
母「一枚くらい、残しておきたかったね。」
ともか「あっそうだ瑛太。いつまでこっちいるんだっけ？」
瑛太「一週間。」
母「今時期仕事、忙しいんでないのかい？」
瑛太「ま、3回忌だしね。」
母「じゃあ、よかった。そろそろお父さんのものを片付けようかと思ってね。」
ともか「うちの鯨ちゃんは、へそくりとか隠してなかったの？」
母「あー。そういえばね。」

ナレ：父は、大きな体で横になっていると鯨のようだったので家ではたまに鯨と呼ばれていた。ゴロゴロしてると妹が座礁した～とケタケタ笑う。その度に父は「なしてよ～」と言って笑ってた。

母「探してみなさい。あったら、山分けしましょ。あとね、お父さんの笑顔の写真ないか探して欲しいんだけど。」
ともか「探してみる。」
瑛太「明日にしよう。明日。今日はもうくたくた。」

ナレ：次の日の朝、父の作業場に向かった。

古いけれど、手入れの行き届いた工具達。
2年前からほとんど何も変わってない。

ともか　「よっしゃー、探してみるか。私は、この本棚から行くね。
瑛太　「俺はじゃあこの作業机から行くかな。」

ナレ：机の上には
鉛筆
消しゴム
走り書きのノート
電気スタンド
ボルタ
何かの充電器
作業机の真ん中の引き出しを開けると小さな鍵が入ってた。
右側の一番上、鍵付きの引き出しに差し込む
SE：カチャ

瑛太　「空いた」

SE：引き出しをあける音
ナレ：中には5本のカセットテープと単2電池4本で動くカセットテープレコーダーが入っていた。
5本のカセットテープにはそれぞれ番号が振られている。

瑛太　「母さーん。ちょっと、いいもの見つけた。」

音楽ＩＮ
ナレ：この物語は、父の遺したカセットテープの音を頼りに父の痕跡を探す物語。

母　「こんなものあったとはねぇ。」
ともか　「カセットテープなんて今どこに売ってるの？」
瑛太　「ネットじゃない？」
ともか　「父さんは買えるわけないでしょ、」
瑛太　「ま、佐々木さんのところだろうね。」
ともか　「あ、佐々木さんのとこには売ってそう。」
母　「で、再生してみた？」
瑛太　「まだ。動くかな・・」

ナレ：①と書かれたカセットを入れてみる。
SE：ガチャ（カセット再生する音）

瑛太　「あっ（動いた、の意）」
父　「あー、あー、テストテスト。ちゃんと取れてんのか。」

SE：海の音
ナレ：そこには、父がいた。

母　「お父さんだ。」

ナレ：母の目からぽろっと涙がこぼれた

母　「あらら。ごめんごめん。ちょっと…びっくりしちゃって」
瑛太　「…」

ナレ：僕は何もいえなかった

ともか　「海じゃない？」
瑛太　「何が？」
ともか　「この音、とってるところ」
瑛太　「…確かに。」
母　「どこの海だろうね。」
父　「取れてるかな？今回は音なりました！聞こえる？」

SE：歩く音とキュキュと音。

ともか　「なんの音？」
母　「…あっ鳴り砂だ。」
瑛太　「イタンキ浜だ」
父　「あー、あとは、綺麗な景色だわ。ははは、カセットテープじゃわかんないか。えーこちらはよく晴れてます。」
母　「お父さんだねぇ。」

ナレ：カセットが急に止まった。

瑛太　「あれ、」
ともか　「え？」
瑛太　「あっ電池かな？」
ともか　「電池？」
瑛太　「電池変えたら動くと思う。母さん、単2、4つある？」
母　「単2はないわ。」
瑛太　「あのさ、みんなで一緒に買いにいかない？」
ともか　「なんでよ」
瑛太　「それでちょっと、買った帰りにイタンキ浜寄ってみよ。」

ナレ：なんだか、母の涙を見ていてもいられなくなった。

母　「今から？」
瑛太　「そう。俺の車乗って。カセットテープ持ってさ。そこで続き聞かない？」

上森くんナレ：イタンキ浜は室蘭市みゆき町から東町の砂浜及びその地名。
鳴き砂があることで知られ、日本の渚百選に指定されている。

SE：海の音。
SE：砂を踏む音

瑛太　「ならないかぁ。」
ともか　「なかなかならないよねぇ。」
母　「やー晴れてるねぇ。」
ともか　「ならないわぁ。」

母　「タイミング合わないとならないよねぇ。」
瑛太　「お父さん、よくなったよね。」

ナレ：母は、ずっと海を眺めていた。

ともか　「風、強いね。車戻る？」
母　「ううん。大丈夫、ここで続き聞きたいな。」
瑛太　「あぁ、うん。聞いてみよ。」

SE：ガチャ（カセット再生する音）

父　「えーこちらはよく晴れてます。ＢＢＱ日和です。やー、綺麗。私は、イタンキ浜から見るトッカリショ展望台が好きです。なんていうか、断崖絶壁がたまらん。」

ナレ：父が見ていたであろう切り立った雄大な崖は、多分父さんがみた時と変わらずにそこにある。

母　「お父さん初めてのデートの時もおんなじようなこと言ってた。」
ともか　「え？初デートイタンキ浜なの？」
母　「そうよ。で、そのときにもあそこの、崖を「たまらん」って褒めてた。」
瑛太　「よく、泳ぎにきたよね。」
ともか　「ねー。」
母　「遊泳禁止になるまではよくきたね。」
父　「よく泳ぎにきたなぁ。私は、駐車場から見る一面の海も好きです。」
母　「昔ね、ここはＢＢＱダメなのにお父さんＢＢＱやるぞって張り切って」

瑛太　「そうだそうだ。で、看板みて慌ててＢＢＱセット車に隠してさ。泳いで帰ったんだよね。」
父　「ＢＢＱしたかったなぁ。」
ともか　「すごい、今さ会話してたみたい。」
母　「本当だね。」
父　「さぁ、今回はこれで終わります。また今度。」

ナレ：カセットテープはそこで止まった。

音楽ＩＮ

ナレ：この物語は、父の遺したカセットテープの音を頼りに父の痕跡を探す物語。

「2本目」

SE：ガチャ
SE：豆電車の音。
SE：雑踏

父　「えー、2本目。とれてるかな。聞こえますか？ここもたまらん所です。中に入っていきたいと思います。ここはね、なんだかほっとするところです。」

ナレ：胸がいっぱいになるからと、カセットテープを再生するのは1日一本というルールになった。
豆電車の音を聞いたとき、ともかはすぐに水族館だといい出し、出発の準備を始めていた。母さんも行きたがっていたが、今日は用事があり来ることができなかった。

上森君ナレ：正式名称、「室蘭民報みんなの水族館」北海道内で最初にオープンした水族館で、北海道の水産業の振興を目的に、捕鯨会社の跡地を利用して建てられた歴史を持つ。

瑛太「ここは、変わんないなぁ。」
ともか「ちゃんと見て。昔とすごくかわったんから。」
瑛太「え？そうかな？」
ともか「キャプション。」
瑛太「キャプション？」
ともか「水槽の下についてる、説明書きのところ。」
瑛太「あぁ。」

ナレ：キャプションに目を通すと、星が並んでいる。星の上には「旨いレベル（魚類担当飼育員高山の個人的感想）と書いている。つまり、この星は美味しかったか、美味しくないかで、星がついているのだ。

瑛太「え？食べたってこと？」
ともか「面白いでしょ」

ナレ：さらに読むと、それぞれに食べた方法や、何が美味しかったかや、この料理に合いそうなど書いてあり、明らかに美味しくなさそうな魚まで食べている。

瑛太「面白いー。これだったら、一個一個見ちゃうよね。」
ともか「それが狙いだと思うんだよね。このキャプションのおかげで一個一個興味を持って見れたでしょ。」
瑛太「確かに。今までちゃんと読んだことないかも。」
ともか「ね、それに室蘭は水産の街だしね。食べることに興味をみってもらえれば水産振興のためにもなるし。」
瑛太「なるほどなぁ。」
ともか「もちろん「食べる」ということに関して批判もあるとは思うけど、興味をもてもらうっていうのが第一だから。」

瑛太「え？ここで働いてるの？」
ともか「ふふ。それもいいなぁ。」
瑛太「はい！飼育員さん」
ともか「はいはい、なんでしょう？」
瑛太「ちなみになんだけど、この飼育されてるお魚を食べてるの？」
ともか「まさか。漁をしてるとたまに同じ魚が釣れたりするからそれを分けてもらうの。」
瑛太「本当になんでも知ってるね。」
ともか「だてにここ、通ってないからね。」
瑛太「そうなの？」
ともか「うん。私年間パス持ってるから。」
瑛太「え？そうなの？」
ともか「そういう人多いよ」
瑛太「へぇ」
ともか「ほら、みて、あの人子供の時もいなかった？」
瑛太「指差すな。まさか。」

ナレ：ともかの指差した方向には、見知らぬおじさんがゆったりとアザラシを見ていた。

ともか「絶対いたよ。」
瑛太「いたかなぁ。」
ともか「聞いてこようか？」
瑛太「いやいい。」

ともか　「公園みたいに、ふらっとこれる場所だからさ。それになんか、ほっとしない？」
瑛太　「ほっとか。」
ともか　「なんか、どこにも居場所がないって思う時とか来ちゃう。ゆったりと時間が進んでる感じがして「ここにいていいんだよ」って言われてる気が済んだよね。」

ナレ：たしかに、ここにいると心がじんわりあったかくなっていく気がする。
父も、ここにきてほっとしてたんだろうか。

瑛太　「あれ、最後父さん何見て終わりますって言ってたっけ？」
ともか　「アザラシじゃない？」

ナレ：カセットをちょっとだけ巻き戻して続きを再生した。
SE：ガチャ（カセット再生する音）

父　「ペンギンもアザラシも可愛いな。たまらん。さぁ、今回はこれでおわります。また今度。」

SE：カセットのサーという音

瑛太　「本当だ。」
ともか　「…お母さん泣いてたね。」
瑛太　「うん。」
ともか　「やっぱり寂しいよね。」
瑛太　「そう思う。」
ともか　「お兄ちゃん、泣いてないよね」

瑛太　「え？」
ともか　「お父さん死んじゃった時も、骨になっちゃったときも。」
瑛太　「あー。なんか実感わかなくて。」
ともか　「そっか。そういうもんか。」
瑛太　「うん。」
ともか　「いつでも、肩なら貸すよ。」
瑛太　「へいへい、どうも。」

SE：急に音が変わってラーメン屋さんのよう。
ラーメンを啜る音

瑛太　「え？つづきがあった。」
ともか　「なんの音？」
瑛太　「ご飯やさんかな？」
父　「あら、おささってた。ははは。失礼、失礼またな。」
ともか　「なんか食べてたね」
瑛太　「な。ラーメンかな。なんかラーメン食べたくなってきた。」
ともか　「ちょっと待って、巻き戻して」

ナレ：ともかがいやに真剣な声を出す。

瑛太　「なに？」
ともか　「よく聞いて、すする音が少し躊躇してる。きっと、カレーラーメンだよ。」
瑛太　「ははは。」

ともか　「なに？」
瑛太　「いや、悪い。あんまり真剣に何いうかと思ったら、ラーメンかカレーラーメンかの話だったから。」
ともか　「おにーちゃんっておとうさんそっくりな笑い方。」
瑛太　「そう？」
ともか　「うん。お父さんかと思った」
瑛太　「カレーラーメン食べて帰るか。」
ともか　「そうしよ。」
瑛太　「久しぶりに駅前の行きたいな。」
ともか　「あそこもうないよ。」
瑛太　「え？そうなの？」
ともか　「大将、引退したよ。」
瑛太　「そうかぁ。わー残念。もうあのイベントに立ち会えないのか」
ともか　「イベントって。」
瑛太　「あそこは、食べる。じゃなくて、イベントだから。味しいラーメン食べれて、あの大将を見にいくっていうね。」
ともか　「あの話、面白かったな。あの、学祭の」
瑛太　「あぁ、ラーメン作りたいって話を大将にしたやつ？」
ともか　「そうそう」

音楽とセリフがフェードアウトしてく。

「3本目」

ナレ：この物語は、父の遺したカセットテープの音を頼りに父の痕跡を探す物語。

SE：ガチャ
SE：エリーゼのためにが聞こえる。

父　「今回はここです。聞こえるかな。ここはいいぞ。たまらん。」
ともか　「えーわかんない。」
母　「私、この音どっかで聞いたことあるわ。」
瑛太　「どこ？」
母　「あっ」

ナレ：母は、ピンと来たようだった。

母　「カセット止めて！」
瑛太　「え？カセット聞いてたら、場所言ってくれると思うけど。」
母　「それじゃ楽しくないじゃない。車出して」
瑛太　「わかった。ともかはいく？」
ともか　「私今日は授業。」
瑛太　「おっ学生さん頑張れよー。」
ともか　「ほーい。いってらっしゃい。事故には気をつけてね。」

SE：車の音

瑛太　「父さんってどうして写真嫌いなの？

ナレ：久々に母と2人きりで、ちょっとドギマギしながら話をする。

母　「ほら、あの人古い人だったから、怖かったのよ。」
瑛太　「写真が怖い？」
母　「写真撮ると魂とられるって。」
瑛太　「嘘、そんなの信じてたの？」
母　「そーそ。」
瑛太　「だから、全部写真が険しいのか。」
母　「そうそう。ビデオカメラも、写真もお父さんにとっては命懸けだったんだから。」
瑛太　「ならよく撮れてた方なんだね。」
母　「そうなの。」
瑛太　「仕事の時の写真とかないの？」
母　「あー真剣な顔つきのならあるけど真剣すぎてちょっと怖いのよね。」
瑛太　「確かに。」

SE：板金屋の3代目の父。あの大きな手からは想像できないほど手が器用で、なんでも作ってしまう父だった。

瑛太　「仕事してる時の父さんはかっこいいよかったよね。」
母　「そうだね。」
瑛太　「そんなところに惚れたの？」

ナレ：いつもなら、なに馬鹿なこと言ってるのと言われるのに今日は反応が違った

母　「（ちょっと笑う）あの人はね、人がよかったんだわ。」
瑛太　「え？お人好しってこと？」

母　「うーん、まぁ。そうね。頼まれごとは断れなくて。」
瑛太　「確かに、ＰＴＡとやってたよね。」
母　「そー、瑛太とともかのことになると更に頑張っちゃうからあの人は。」
瑛太　「そうだったんだ。」
母　「そうよ。どんなに疲れてても、週末は遊びに連れてくんだって無理してね。あっここ、右ね。」
瑛太　「あっうん。」
母　「それで体調壊して、私に怒られて。でも、それくらいあんたたち2人のこと大事にしてた。
　さぁ、ついた。」
瑛太　「え？ここ？」
母　「そう、とんてん館ここのオルゴールとかじゃないかしら？ここわかる？」
瑛太　「あっここの桜ギリギリ咲いてるね。」

SE：とんてん館の前の桜の木が風に揺られて、花びらをちらしていた。

母　「さ、入ってみましょ。」

上森ナレ：とんてん館。正式名称は室蘭市民俗資料館。室蘭の歴史と文化をさまざまな視点から展示
　している場所である

SE：古い時計の音

ナレ：ちょうど、3時の金がなった。

母　「あら、びっくりした。」
瑛太　「古い時計だね。置スリゲル時計だって。」

ナレ：ここには、柱時計、洗濯機、アイロン、ラジオ、電髪パーマ機と寄贈されたものたちが静かに並んでいる。

母　「あら、懐かしい。」

SE：炭火を入れて使うアイロンを見ながら母がつぶやく

瑛太　「アイロン？使ったことあるの？」

母　「私のおばあちゃんが使ってたのよ。：お父さんのものとか置いてくれないかねぇ。」

瑛太　「まだちょっと新しいんでない？」

母　「そうね。確かに。でも、こうやって見てもらえて懐かしいって思ってもらえるなら残していくのもいいねぇ。」

瑛太　「別に残しておいてもいいんだよ？」

母　「なに？」

瑛太　「家のもの。」

母　「うんん。いいのよ。そろそろ、片付けないとね。」

瑛太　「そー。」

母　「どうしたって、残したいものは出てくるんだから。」

ナレ：父はなぜ音をカセットテープを残したんだろう。

母　「思い出した。思い出した。乗って。」

ナレ：昔の地図を眺めていた母がポンと手を打った。

瑛太　「まだ、2階見てないけど？」

母　「いいから、乗って。」

ナレ：2階の、港町の資料や、開拓の歴史につての常設展示をせっかくだから見ていきたいと思ったが、スタスタ歩く母について車に乗り込んだ。

SE：車の音

母　「ここ、右ね。あれ、工場の音だわ。」

瑛太　「工場って？」

母　「ほら、日鉄さんの工場の音よ。」

瑛太　「あぁ。」

森下ナレ：正式名称、日本製鉄株式会社北日本製鉄所室蘭地区。主に自動車関連産業に向け、原料から鉄の製品を作る過程をこの工場一つで行うことができる。札幌ドーム約79個分の広さで、約6000人が働く。

母　「多分、ここの音だと思うのよね。この音は、機械が動いてる時に鳴る作業音じゃないかしら。」

瑛太　「あぁ、確かに、そんな気がする。」

SE：エリーゼの為が聞こえる

母　「ほら！大正解。」

瑛太　「さすが。」

母　「じゃあ、続き続き！」

SE：ガチャ

父　「でっかいなぁ。日鉄さんの工場はこの街の心臓みたいだよなぁ。24時間、365日休むことなく動き続けて。この工場のおかげで、や、おかげかはわからんけどこのまちは「生きてる」って気がするんだよ。夜は工場夜景ってお客さんも連れてくるし。たいしたものだ。うん、たまらん。」

ちょっとカセットの間があく。

父　「えー、そして今回は特別に許可を取りまして中に見学に入らせてもらいました。この音わかるかなぁ。あっまでよ、中に入らないとわからないか。はっはっはっまぁいいや。せっかくなのでこの音を残しておく。」

SE：高炉から、銑鉄が出る音。

父　「わー、すげー。今まで見たこのない火花！花火みたいだ！！これが、鉄の元かぁ。あっつい！たまらんな、たまらん。すごい煙！」

瑛太　「これは、わからないわ。」

母　「ね。」

瑛太　「お父さんがはしゃいでるのはわかるけど。」

こうき　「あれ？瑛太じゃない？」

SE：懐かしい声に呼ばれて、振り向くと作業着をきた中学の同級生が立っていた。

瑛太　「え？こうき？」

こうき　「久しぶり。元気だった？え？こっち帰ってたの？」

瑛太　「そう。」

母　「あら、お久しぶり。」

こうき　「あっお母さんお久しぶりです。」

母　「あらー、大人になって。」

こうき　「お母さんは変わらず、お綺麗ですね」

母　「あら、やだ。」

瑛太　「ここの工場で働いてるんだっけ？」

こうき　「今仕事終わって帰り。」

瑛太　「え？こんな時間に？」

母　「工場は三交代制だもね。」

こうき　「そうです。今日は7時半から15時半の日で。」

瑛太　「そうか、工場は24時間動いてるからか。」

母　「あっそうだ。こうきくん。このおとってなんの音かわからない？」

ナレ：母がおもむろにカセットテープの音をこうきにきかせている。
昔に比べて体も顔つきも頼もしくなった友人の横顔を見て月日が流れたのを実感した。

こうき　「あっ、これ「開口機、旋回します」って言ってますね。多分高炉から、銑鉄って言って鉄の元を取り出す時の音じゃないかと。」

母　「なるほどね。」

瑛太　「高炉？」

こうき　「鉄鉱石を溶かして鉄の元を取り出すとこ。でっかい塔みたいになってるんだよ。溶けた銑鉄は１５００度以上になるんだよ。」

瑛太　「うへぇ。」
母　「工場内あっついんでないかい？」
こうき　「あ、もちろん鉄の近くに行くと熱いんですけど、鉄から離れればそんなに暑くはないんですよ。」
母　「へぇ。そうなんだ。」
瑛太　「ちなみに中って広いの？」
こうき　「めちゃくちゃ広いよ。今はもう慣れたけど、入社当時は工場で迷子になるって思ったからね。」
瑛太　「そうか。（笑）」
こうき　「鉄道も通ってるし」
瑛太　「鉄道？すごいな。信号があるのはなんとなく見えてたけど。」
母　「交通安全に厳しいのよね。」
こうき　「そうです。そうです。指差し確認とかちゃんとしなきゃなんなくて」
瑛太　「忘れるとどうなるの？」
こうき　「泣くほど、怒られる。」
瑛太　「まじ？」
こうき　「嘘（笑）怒られはしないけど、大事なことだからね。」
瑛太　「どうりで、工場出ても指差ししてる人多いんだね」
こうき　「もうね、あれは職業病。」
瑛太　「（笑）」
こうき　「あっ、ごめん瑛太。この後デートなんだ。準備しないと。」
瑛太　「マジかよ。」
こうき　「お前、彼女は？」
瑛太　「まぁ。それはまた次回、会ったときにでも」
こうき　「正月帰ってくるの？」
瑛太　「そのつもり」

こうき　「そしたらみんな誘って飲もう。」
瑛太　「そうしよう」
こうき　「じゃあご安全に。」
瑛太　「ご安全に」

SE：爽やかに敬礼をして、歩いていく友人を見送った。

母　「頼もしいねぇ。」
瑛太　「本当だね。」

ナレ：父のこの工場はこのまちの心臓だ。という言葉を思い出した。
心臓を動かす、同い年の友人はなんだかとっても頼もしくて、父の背中にも似ている気がして少しだけ嫉妬した。

「4本目」

音楽IN「鯨の腹の中」
ナレ：この物語は、父の遺したカセットテープの音を頼りに父の痕跡を探す物語。
SE：ガチャ
SE：ふいごの音がする。

父　「今回は、この音。わかるかなぁ。」
瑛太　「瑞泉鍛刀所だ！」
ともか　「え？どこ？」

瑛太　「日本製鋼所M&E室蘭製作所の瑞泉鍛刀所だよ！」
ともか　「さらっと正式名称が言えるのが怖い。」
母　「よくわかったねぇ。」

上森ナレ：日本製鋼所M&E室蘭製作所は日本製鋼所の発祥地であり、世界で唯一となる670tの鋼塊を製造することができる工場。世界屈指の生産設備と技術力によりエネルギー産業を支えている。近代化により衰退していた日本刀の製作技術向上と保存のために「瑞泉鍛刀所」を開設した。

瑛太　「聞いてこのふいごを動かす音。この音、絶対そう。ほら、炭の音パチパチって音も聞こえるでしょ？」

ナレ：目を瞑ると、幻想的なオレンジ色に揺らぐ炎が思い出せた。日本刀の形に作り上げる作業、「火造り」をしている音だ。

瑛太　「うわぁーまたいきたいな。」
ともか　「ちょっとテンション上がりすぎじゃない？」

SE：突然、大きな音。鍛錬の音

父　「すげー、たまらん！」
母　「わ、びっくりした。」
瑛太　「待って、いいな、父さん。この音は鍛錬の音じゃん！」
ともか　「それはもうマニアだよ。」
瑛太　「え？ともかも見学一緒に行ったろ。ほら、大槌を振るって鋼を打つ「先手」は今は機械式でさ、その機械は2人分の力があるって。」

ともか　「そうだったっけ。」
母　「見学、お父さんに連れて行ってもらったんだっけ？」
瑛太　「そうそう！見学に連れてってもらったの。懐かしいなぁ。」

ナレ：自分自身、刀が大好きだったこともあって父さんに何度もねだって見学に連れてきてもらった場所だった。刀作りは何度見ても飽きないし、何と言っても瑞泉鍛刀所がめちゃくちゃかっこいいのだ。刀鍛冶の着る、ススのついた白い作務衣。
日の力を借りて刀を作るための、低い窓。
燃えないように土のままの床。ぐるっと一周飾られているしめ縄。
もう全てがカッコよかった。

父　「これが、幾年月時代が変わっても、変わらない音だ。ものづくりの原点の音。たまらんな。」

SE：研ぎ石の音

瑛太　「聞いて、ほら、研いでる音だ。」
ともか　「そうだね。」
瑛太　「もっと感動してよ。」
ともか　「そんな熱量で来ると逆に」
瑛太　「今思うと日本製鋼所は何度も見学行ったよね。おにーちゃんが行きたがったっていうのもあるけど。」
母　「確かに。」
瑛太　「ほら、お父さん、板金屋だったじゃない？それで、手技の会ってのがあって刀鍛冶の方と仲よかったのよ。それで、特別に見学させてもらってたの。」

ともか　「私、実はお父さんの仕事よくわかってなかったんだよね。」
母　「お父さんはね、鉄道のレール。」
ともか　「鉄道のレール。」
母　「そうそう。鉄道が盛んだった時は従業員さんもいたんだけど、どんどん仕事が少なくなって最後はお父さん1人で頑張ってたんだわ。」
ともか　「ふーん。私、結局お父さんの働いてるところ見たことなかったんだよね。」
母　「私は、お前達が小さい頃は2人とも預けてお父さんと一緒に屋根登って手伝ってたよ。」
ともか　「すごい。お母さんやるね。」
母　「まぁね。お父さん一人でやってたから人手いるときは駆り出されてたの。」
ともか　「でもうちの鯨ちゃん、家ではお母さんに任せてほとんどゴロゴロしてたけど。」
母　「一所懸命に働いてたよ。見せてあげたかったわ。」
ともか　「見たかったなぁ」

ナレ：気が付けば、研ぎ石の音はなくっていた。

ともか　「……これでカセット終わりかな？」
瑛太　「どうだろ。」
父　「えー、今回は続きます。この後、白鳥大橋をくぐります。渡るっていうのはよくけれどなかなかくぐれないよね。」
ともか　「泳ぐ気？」
母　「ナイトクルージングだ。」
瑛太　「あぁ。船でくぐるのか。」

SE：エンジン音

ナレ：残念だが、カセットのその後は船のエンジン音で、何を言っているのかほとんどわからなかった。

母　「今日はみんなで、クルージングしましょ。」

ナレ：カセットを大事にしまいながら母はエプロンを外す。

ともか　「いいね。」
瑛太　「なんか、めちゃくちゃ室蘭を観光してる気がするんだけど。」
母　「こんなことないと、なかなかクルージングもできないし。いい機会よね。」

上森ナレ：スターマリン株式会社のナイトクルージング。創業から10年以上無事故で運行している。夜へと移ろう室蘭港を駆け抜けるクルーザーは北海道有数の工場群、ライトアップされた白鳥大橋、測量山の輝きと、場所によって違った景色を見ることができる。
受付を済ませて救命ベストを取り付け、夜の海へ出発する。
女性の船長さんが工場や、白鳥大橋のことを軽快に説明していく。
母はいちいち俺に伝えてくる。

母　「あの風力発電は1つで、白鳥大橋の電気を賄ってるらしいわよ！で、その電力は一ヶ月分のここいらへんの地域の電気を賄えるとか。瑛太！見てみて！今のところは、日鉄さんの工場だよ、クレーン動いてるわね。」
瑛太　「聞こえてし、見えてるよ。」

森下ナレ：エンジンとハンドルを回すときに時折聞こえる油圧の音が心地よかった。
何より、水上から見る室蘭の景色が綺麗だった。

白鳥大橋をくぐってしばらくすると、船長さんが左側をじっとみている。

船長　「みなさん、左側をご覧ください。クジラが顔を出しました。」

船内からおぉという、声が上がった。

ミンク鯨である。

室蘭水族館の常連のともかが、俺に耳打ちする。

ともか　「クジラはね、仲間たちとコミュニケーションをとるために10ヘルツから39ヘルツの声で鳴くんだって。」

ナレ：ウチの鯨ももしかしたらコミュニケーションを取るためにカセットに音を入れたのかもしれない

音楽ＩＮ「鯨の腹の中」

ナレ：この物語は、父の遺したカセットテープの音を頼りに父の痕跡を探す物語。

「5本目」

ナレ：これが最後のカセットテープ。カセットテープには、5本目の他に花丸が書かれていた。いろんな妄想が膨らんでこのカセットテープだけは一人で聞くことにした。イタンキ浜の駐車場は今日は平日で波が穏やかだからか、人がいない。

ＳＥ：ガチャ

ＳＥ：台所の音。

母　「瑛太―。起きなさい。」

瑛太　「頭いたーい。」

母　「やっと起きてきた」

瑛太　「二日酔い」

母　「昨日飲みすぎたんでないの」

ナレ：カセットテープに残ってたのはなんてことない、父が元気だった頃のありし日の家の会話だった。

ともか　「ごちそうさま。」

母　「はーい。今日はバイト？」

ともか　「うん。」

母　「夜ご飯どうする？」

ともか　「いる。」

母　「わかった。お父さん、何ニヤニヤしてるの」

父　「ん、なんでもない。」

母　「はんかくさい」

父　「なしてよ～。」

母　「瑛太、バナナジュース飲む？」

瑛太　「いらない。」

母　「いいから、飲みなさい。ほら、お父さんも飲んでるんだから」

ともか　「じゃあ行ってきますー。」

母　「はーい。気をつけてね。」

瑛太　「だめだ、もう一回寝る。」

母　「今日は何にもないの？」

瑛太　「うん、夕方から。」

母　「お昼におきなさいよー。」

瑛太「うん、じゃあ、おやすみなさい」
母「全くもう。お父さんも今日は出かけるんでしょ？コーヒーは飲む？」
父「飲みます。」
母「うん。」
父「寂しくなるねぇ。」
母「なぁに？」
父「瑛太さ。」
母「仕事なんだから仕方ないでしょ。」
父「札幌かー。」
母「なんも、高速乗ったら2時間かからないよ。」
父「札幌かー。」
母「都会っ子になって帰ってくるかもねぇ。」
父「都会っ子かぁ、すごいなぁ。」
母「なに？」
父「俺は室蘭しか知らなかったからさ。」
母「あら、後悔してるの？」
父「いや、してない。」
母「そ。」
父「もう、ここ以外は考えられんなぁ。」
母「そうね。」
父「目閉じても、浜の音とか工場の音聞けばどこなのかわかる。それぐらい、深く長く室蘭にいたって事だな。」
母「そうね。」
父「瑛太、室蘭のこと忘れてしまうかな。」

母「そんなわけないでしょ。」
父「だよな。」
母「心配なら、写真とっておくればいいべさ。」
父「そういうのは俺わかんないからさ。」
母「覚えないと、時代に取り残されるよ。」
父「ははは。いい。取り残されても。」
母「なんでよ。」
父「母さんがいるから。俺は目閉じて音だけできく。あとは、想像できるべさ。」
母「なにそれ、」
父「写真には映らない美しさがあんのよ。それがたまらん。」
母「それだから、ともかにばかにされるんだよ。今度教えてあげるから。」
父「いつもありがとうございます」
母「何急に。」
母「え？ありがとうはありがとうだよ。」
父「大丈夫？」
母「ははは。大丈夫ってなんだよ。」
母「さ、食べちゃって。ちょっと、私回覧板回してくるから。」

音楽

父「イタンキ浜
室蘭水族館。
日本製鉄の刀の音。
工場の音

クルージングの音
そんで、お前たち
たまらんな。
たまらん町だ。
俺は、機械はよーわからんけど。
残しておきたいものも、よーわからんけど。
俺は、俺のたまらんものの音をこうやって残すことにした。
えー、俺の家族がその、もしこのカセットを聞いたら、
その、なんだ、えー、お前達のことが…ははは だめだ 小っ恥ずかしい。
やめやめ。
えー、では、また今度。バイバイ。

SE：ガチャとカセット切れる音
SE：電話

瑛太　「母が、妹が、俺が好きだった音。」

そして、父の笑い声。
うちの鯨の腹の中がようやく見られた気がした。

SE：ガチャとカセット切れる音
SE：電話

ともか　「もしもしおにーちゃん？明日帰るんでしょ？今日さ、お母さんが外でお昼食べないかって。」

瑛太　「あぁ。」
ともか　「え？おにーちゃんどうしたの？」
瑛太　「なに？」
ともか　「泣いてるの？」
瑛太　「えっいや。泣いてないし。」
ともか　「おかーさん、おにーちゃんが泣いてる。」

音楽、FMのラジオが流れている飲食のお店

母　「ちくてんそばの冷たいの2つで。」
店員　「かしこまりました。」
母　「迷うな。おすすめありますか？」
瑛太　「かつ丼がおすすめです。」
店員　「じゃあ、それでお願いします。」
瑛太　「かしこまりました。」
ともか　「にいちゃん明日帰るの？」
瑛太　「そー。」
ともか　「全然掃除しなかったじゃん。」
瑛太　「あっ本当だ」
母　「いいよいいよ。」
瑛太　「すっかりカセットテープにかかりきりになっちゃった。」
ともか　「それに1円もへそくりはみつかんなかったしね。」
瑛太　「あっそうだね。」

ともか　「結局写真もなかったし。」
母　「1枚くらい笑顔の写真が出てきてもよかったのにねぇ。」
ともか　「本当だよ。」
母　「でも、2人ともありがとうね。」
瑛太　「なにが？」
母　「もうお父さんに会えないと思ってたから。こんなところにいたとわね。」

ナレ：母はカセットを大事そうにさすった

ともか　「しかも、満面の笑みのね。」
母　「そうよ。大爆笑のお父さん。」
母　「これ、カセット以外に保存できる方法ないの？」
瑛太　「次帰ってきたときにやっとくわ。」
母　「爪おっとかないと。」
ともか　「爪？」
母　「爪おると、間違って録音ボタンおささっても録音が消されることないのさ。」
ともか　「そうなの？爪ってどこについてるの？ちょっと調べてみる。」
FMビュー　「ラジオから流れる測量山ライトアップ説明」
瑛太　「ライトアップか。」
ともか　「ライトアップ、してもらう？４０００円だっけ？」
母　「そうそう、４０００円で1日ライトアップしてくれるのよ。この手が届いちゃう感じがいいのよねぇ。」

ナレ：昭和63年11月から毎日誰かの思いが読まれる。毎日のバトン。

瑛太　「次帰ってきたらＢＢＱしようか。」
ともか　「え？ＢＢＱ？」
瑛太　「うん。」
母　「ＢＢＱコンロあったけか。」
瑛太　「新品のが作業場にあったけど。」
母　「あら本当。」
ともか　「母さんじゃないの？」
母　「買わないよ。お父さんかね。」
瑛太　「父さんだわ。」
3人　「ははは。」
瑛太　「たまらんね。」
FMビュー　「では、メッセージ読ませていただきます。」

いつもありがとう。今度こそＢＢＱしようね。お父さんより。

FMビュー　「それでは、この曲でお別れです。KENTOさんで『クジラの腹の中』」

音楽がかかって終わり

ラジオドラマ〈恵庭篇〉

『過ぎゆくものたち』

作／常本亜実（札幌座）

「花開いてゆく街」

常本亜実（札幌座）

札幌から新千歳空港へ向かう途中で通るまち、そんなイメージしかありませんでした。

恵庭と聞いて思いつくことと言えばそのくらい。ですが取材を重ねるうちに、その印象も大きく変わることになりました。

取材の中で印象に残っていることがいくつかあります。

まず、文教大の学生さんに恵庭のイメージを尋ねたところ、「帰ってきたくなる街ですね」と語ってくれたことから、「恵庭を帰ってきたくなる街にしたい」という思いで長年頑張ってきた方たちの努力が、間違いなく実っているんだと実感したことです。発信側の想いと、受取手の感じ方が合致するのはとても難しいことですので、恵庭のまちづくりは正しい方向性で進んできたんだと感動しました。

そして、花のまちづくり活動に参加されている市民の方に、「もっと恵庭の魅力を違う街の人にも知って欲しいですね」と投げかけた時に、「そんな風には思っていません。自分たちの街の魅力は自分たちが知っていれば」とおっしゃっていただいたことも胸に残っています。それが「帰ってきたくなる街」の正しい姿であるような気がしました。

この作品は、主人公「八重子」というとある一人の女性に様々な事象を重ねて成り立っています。

まず、恵庭という街の成り立ち。何もなかったところから、少しずつ自分たちの手でやりたいことを見つけ、今となっては多くの人で賑わうようになったその様を、八重子が少しずつ自分のやりたいことを見つけ、それに人がどんどん集まってきて人生が豊かになっていく様子と重ねました。恵庭は「花の街」とも呼ばれていますから、人生の原体験を「種子」とし、自分のやりたいことはこれかもしれない、と見つけた瞬間を「萌芽」、そしてそれが実った瞬間を「開花」と章立てています。

また、「過ぎていくもの」をもう一つのテーマとし、時代、季節、人、様々なものがめまぐるしくすぎていく中で、帰れる場所があること、帰ってきてくれる人がいることの温かさを描けたらと思いこの作品を書きました。

▲恵庭「過ぎゆくものたち」チームの皆さん（左2人目が常本さん）

私にとって、ラジオドラマを書くことも、どこかの街を取材して作品にすることも初めての経験でしたので、至らない部分はたくさんあったと思いますが、本当に素晴らしい時間を過ごさせていただけたと感謝しています。本当にありがとうございました。

ラジオドラマ制作で感じた地域コミュニティの力

三浦真吾（株式会社あいコミ 地域FM放送e-niwa 取締役・編成プロデューサー）

この度、当局としては、初の試みとなるラジオドラマ制作にあたり、多くの関係者の協力と理解のもとに、無事に本プロジェクトを遂行することができました。札幌演劇シーズン様をはじめ、この度の脚本・演出を手掛けられた常本亜実さんのご尽力とご支援により、地元恵庭市の魅力を盛り込んだ素晴らしいシナリオが生まれ、本物指向の効果音収録を地元飲食店で行うなど、「花のまち恵庭」をローカルアイデンティティとする地元恵庭市と深く結びついた内容になりました。10月下旬の顔合わせと本読み、全3回の本編収録作業には、計12役11名のキャストをラジオ局の市民パーソナリティとして活躍される方々が演じていただきました。制作過程自体が、地域を見つめる重要な機会にもなり、恵庭の魅力や人々の魅力が作品に散りばめられるという経験は、私たちにとって大きな喜びとなりました。

▲ラジオドラマ収録風景

成果としては、ラジオドラマのオンエア直後や、後日Podcastを拝聴していただいた多くのリスナーからの反響を得ることができました。また、市民ボランティアパーソナリティからは、「住んでいるまちのシナリオに親しみを感じ、そのドラマ制作に関われたことがとても貴重な体験であった」といった感想や、ラジオドラマ制作に積極的に参加してくれた地元の人々からも「次回作があれば、また参画してみたい」といったポジティブな反応も得ることができました。この結果、恵庭市のまちづくりに関する新たな視点を提供し、地元の魅力を広く発信することができたと考察します。

課題としては、初のラジオドラマ制作だったため、演出や制作スケジュールの調整、収録場所が完全防音ではなかったことから、編集作業に多くの時間を費やしてしまうなど、様々な課題に直面しました。これらの課題は、今後の放送での改善点として捉えています。また、より多くの地元の人々に参加していただくための方法を考える必要があります。

本プロジェクトにご協力いただいたすべての皆様に感謝申し上げます。

▲ドラマにも出てくる食堂ゝ月の「ポークチョップ」

●ラジオドラマ恵庭編

『過ぎゆくものたち』

脚本・監督　常本亜実（札幌座）

中学卒業間近の同級生　八重子とまりこ。これからについての不安と期待を話し合いながら、成長していく。大人になり、様々な出会いと、このまちの発展とともに、2人はどのような人生を進めていくのか。

【出演】
やっちゃん……岩野ゆな
吉田八重子……岩野ゆかり
やっちゃんの母……平井あずさ
やっちゃんの父……コージー
まりこ……平井こと
かな……春陽かおり（ix-alice）
花のまちづくり推進委員 太田……イノッチ（usagi Mark photo）
太田の娘（優子）……花音りおな（えにわっ娘）
ちょん月の店員……黒田雄亮
しゃけ焼き本舗の店員……森口雄貴
カフェの客……よしと
カフェの客……かねさん（from E…）

【主題歌】「鈴蘭」
作詞・作曲 黒田雄亮

【協　力】
メイキング映像協力
Stella Image&Design（北山洋一）
取材協力
花のまちづくり推進会議 会長
内倉真裕美さん
取材収録協力
食堂ちょん月、しゃけ焼き本舗恵庭店
記事掲載
北海道新聞社千歳支局・
地域情報紙ちゃんと

【制作・編集】
e-niwa

▲花のまち恵庭

1章　種子

やっちゃんM　「やっちゃん、そう呼ばれていた。お父さんもお母さんも、おじいちゃんもおばあちゃんも、先生もお菓子屋さんのおばさんも、みんな私のことをやっちゃん、と呼んだ。そして、親友のまりこも」

学校のチャイム

まりこ　「やっちゃん、帰ろ」

やっちゃんM　「昭和最後の年、私たちは恵庭市立恵庭中学校の3年生だった」

二人分の足音。

まりこ　「それでねやっちゃん、この前私の家に従兄弟が泊まりに来てね、東京で流行ってるっていうワンピース見せてくれたの！それがまたひまわりとかついててすっごい可愛くてさ～。いいなーって、私もちょっと着せてもらっちゃった」

やっちゃん　「へー。まりこ、ひまわり柄似合いそう」

まりこ　「……でもさ、そんなワンピース、着ていくところないじゃん。ここ、恵庭にさ」

やっちゃん　「……まあね」

吹き抜けてゆく風。

カッコウの鳴き声。

やっちゃん　「本当になんもないよね」

まりこ　「家、そして」

やっちゃん　「川。それだけ」

漁川の流れる音。

まりこ　「（口真似）漁川は鮭が遡上してくる川で9月頃が最も盛んです」

やっちゃん　「田中先生！似てる！！」

まりこ　「でしょ！」

漁川の音。

カッコウが再び鳴く。

やっちゃん　「川の音聞いてるとさ、なんも考えずに済むんだよね」

まりこ　「わかる」

やっちゃん　「でしょ」

笑う二人。

二人分の足音。

やっちゃん　「そんな我々のお家に着きましたよ」

まりこ　「本当、やっちゃんが向いに住んでることだけが救いだよ」

やっちゃん　「お互いにね」

まりこ　「じゃ、また明日ね。心の友よ」

やっちゃん　「うん……あ、心の友よ、明日、進路希望調査票の提出、忘れないように」

まりこ　「うわ忘れてた！！」

やっちゃん「やっぱり。じゃあ明日ね」
やっちゃんM「開発まもない恵庭の恵み野地区は、文字通り何もなかった。何もない街を、毎日まりこと二人で歩いた。まりこと私、まだ小学校に入る前から向かいに住んでいて、ずっと一緒に育ってきた」

玄関を開ける音。

やっちゃん「ただいま。あれ、お父さん」
父「おかえり。よかった。出る前に会えて」
やっちゃん「お父さん、向こう行くの明日じゃなかった？」
母「さっき会社から電話あって、問題が起きたから早くきてほしいって」
父「うん。また来月に帰ってこれるといいんだけど」
やっちゃん「……そっか」

車の音。

父「迎えだ。行ってきます」
やっちゃん「行ってらっしゃい」
母「……行ってらっしゃい」

玄関の閉まる音。

やっちゃん「……お父さん、急だね」
母「そうね」
やっちゃん「……昨日帰ってこれたばっかりだったのにね」

母「そうね」
やっちゃん「単身赴任ってそういうものなのかな」
母「……八重子」
やっちゃん「……なに？」
母「お母さん、今日食欲ないからこれでなんか食べておいで」
やっちゃん「……うん」

玄関を開ける音。
吹き抜ける風。

やっちゃんM「母に渡されたお金を握りしめて、どうすることもできない私は玄関の外で立ち尽くすしかなかった……だけどそんな時いつも」

まりこ「やっちゃん」
やっちゃん「まりこ……」
まりこ「ご飯、行く？」
やっちゃん「え、でも……」
まりこ「久しぶりにちょん月行きたいってお母さんに言ったら、勝手に行ってこいって」
やっちゃん「そんな」
まりこ「ポークチャップ。行くしかないっしょ？」
やっちゃんM「まりこの部屋の窓からは、私の家の玄関が見えた」

厨房の音。

二人　「ポークチャップ二つ、お願いします！」
店員　「はいよ、ポークチャップ、二つね」

厨房の音

二人　「いただきます！」
まりこ　「今日もうまぁ……」
やっちゃん　「ね、うまい」
まりこ　「次こそは生姜焼きとかラーメンとか別なの食べよーって思うんだけどさ、結局ポークチャップにしちゃうんだよね」
やっちゃん　「わかる」
まりこ　「あー、ちょん月、家の隣にあったら良いのに」
やっちゃん　「えー？それは厳しいしょ」
まりこ　「でも隣にあって毎日食べに来れるんだったらさすがに違うの食べてみようと思うじゃん」
やっちゃん　「毎日って」
まりこ　「あ、今デブって思ったっしょ」
やっちゃん　「思ってない思ってない！」
まりこ　「このやろ」

二人、戯れながら笑う声。
食器の音。

まりこ　「なに？」

やっちゃん　「ん？」
まりこ　「なんかにやにやしてる」
やっちゃん　「してない！」
まりこ　「してるしょにやにや！」
やっちゃん　「えー……ありがと」
まりこ　「なに？」
やっちゃん　「なんでもありません！冷めるよ」
まりこ　「もー」
やっちゃん　「ずっとあるといいね」
まりこ　「何が？」
やっちゃん　「ちょん月。私たちが大人になってもさずっとあるといいな」
まりこ　「あるしょ」
やっちゃん　「そしたらさ、仕方ないから大人になっても一緒に行ってあげるよ」
まりこ　「何その言い方！」
やっちゃん　「まりこが別の料理食べるとこ見ててあげる」
まりこ　「見てなよ！10年後には全種類制覇してるから」
やっちゃん　「10年後っておっそ！」

二人の笑い声。

やっちゃんM　「まりこと私、ずっと一緒だと思っていた。永遠の中にいた私たちは、永遠なんてないことを知らなかった」

チャイムの音。

二人分の足音。

まりこ　「だいぶ寒くなってきたね」
やっちゃん　「ね。春がきたら高校生だ」
まりこ　「……ね」
やっちゃん　「でもその前に受験かあ」
まりこ　「やっちゃん」
やっちゃん　「ん？」
まりこ　「私……私ね、恵庭北高には行かない」
やっちゃん　「え？あ、恵庭南にするとか？」
まりこ　「違う。札幌の高校、受験するの」
やっちゃん　「……ほんと……？」
まりこ　「私、ずっと恵庭から出て、もっと広い世界見てみたいって思ってて、それで高校も札幌に行きたいなって思ってたの」
やっちゃん　「……うん」
まりこ　「そしたら、お父さんが転勤するって話が出て、私が札幌の高校行きたいて話したら、なら引っ越そうってなって」
やっちゃん　「……そうだったんだ」
まりこ　「だから、高校からは別々になる」
やっちゃん　「……そっか」

二人分の足音、先ほどよりゆっくりとなる。

まりこ　「……ごめんね」

やっちゃん　「え？やだな、なんで謝るのさ」
まりこ　「だってやっちゃん……泣かないでよ」
やっちゃん　「泣いてないよ！」
まりこ　「本当？」
やっちゃん　「……まりこ、そんなこと考えてたんだね」
まりこ　「大したことじゃないよ」
やっちゃん　「ううん。私は何も考えてなかった。このままりこと恵庭北高いって……将来のことも……たぶんなんとなく」
まりこ　「……きっとみんなそうだよ」
やっちゃん　「自分でこうしたいってあるの、すごいと思う」
まりこ　「そうかな」
やっちゃん　「……うん、すごい」

玄関を開ける音。

母　「やっちゃん、お帰りなさい」
やっちゃん　「……ただいま」
母　「遅かったね。ご飯できてるから早く着替えといで」

食卓の音

やっちゃん　「お母さん」
母　「なに？」
やっちゃん　「もし私がさ……」

母　「なによ」
やっちゃん　「……なんでもない」
やっちゃんM　「その夜、布団の中で考えた。私もまりこと同じように恵庭を出て、そして……そこまで考えて、母の寂しそうな横顔がよぎった。私が出て行ったら、母はこの家で一人。行ってらっしゃいと言った後、お帰りなさいと言える日まで。母の寂しい背中を想像してしまって、初めて布団の中で泣いた。ただ、どうしようもなく泣けた」

合唱「恵庭中学校校歌」

やっちゃんM　「あっという間に卒業式を迎え、まりこは今日札幌へ旅立つ」

まりこ　「やっちゃん、手紙書くから」
やっちゃん　「うん。元気でね」
まりこ　「……心の友よ、達者でな」
やっちゃん　「心の友よ、いつでも恵庭に帰っておいで」
まりこ　「うん。じゃあね」

JRの走行音。
ちょん月の扉を開ける音。

店員　「いらっしゃい」
やっちゃん　「……ポークチャップ、ひとつ」
店員　「はいよ」

寂しげな食器の音。

やっちゃん　「ご馳走様でした」

一人分の足音。
漁川が流れる音。

やっちゃんM　「何も無い街を、ただ一人歩いた。恵庭にはもうすぐ冬が来る。道端に、まだ咲かないすずらんが、寒そうに震えていた」

2章　萌芽

八重子M　「八重子さん。そう呼ばれていた。時代が平成になり、もうだいぶ経った頃、私は恵庭駅から歩いて少しのところにあるこじんまりとしたカフェで働いていた」

ドアベルの音。

八重子　「いらっしゃいませ！」
太田　「こんにちは。八重子さん」
八重子　「太田さん！こんにちは！」

八重子M　「パスタが自慢のこの店は、いつもたくさんの常連さんが訪れる」

太田　「八重子さん、これ見てよ」
八重子　「これ……今月発売のミセス？」
太田　「そう、これにね、ほら」

雑誌を捲る音。

八重子　「すごい！恵庭の特集！」
太田　「そうなんだよ！この前『全国花の街づくりコンクール』で恵庭が最高賞をもらっただろ？それで特集組ませてもらえないかって話がきて」
八重子　「そうだったんですね」
太田　「八重子さんもやろうよオープンガーデン」
八重子　「そうですね……いつか」
太田　「いつでも待ってるから」
八重子　「太田さんたちはすごいですね」
太田　「そう？」
八重子　「『花のまちづくり推進委員会』の皆さんもこう、目標に向かって一直線！って感じで」
太田　「そうかい。まあみんな恵庭を帰ってきたくなる街にするんだって張り切ってるからね」
八重子　「……帰ってきたくなる街かぁ……」

ドアベルの音。

八重子　「いらっしゃ……あら」
かな　「やっちゃん！」
八重子　「かなちゃん、こんにちは」

かな　「こんにちは。外、少しずつあったかくなってきたね」
八重子　「ね。もうすぐ春。そしたらかなちゃんは4年生か。就活だね」
かな　「やめてー！」
八重子　「あはは。ほんと札幌から文教大までよく通ってるよ」
かな　「自分でもそう思う。あ、アイスティーと、ペペロンチーノお願いします」
八重子　「はーい」

グラスを置く音。

かな　「やっちゃん聞いて、私ね実は就活じゃなくて、留学したいんだ」
八重子　「留学！？」
かな　「海外で勉強して、海外で仕事がしたいの」
八重子　「そうかあ。ちゃんと夢があるんだね」
かな　「ふふ。やっちゃんは？」
八重子　「私？」
かな　「やっちゃんの夢」
八重子　「……そうだなあ……」
太田　「八重子さん、注文いいかい？」
八重子　「あ、はあい」
八重子M　「この十年と少しで恵庭はだいぶ変わった」

玄関が閉まる音。

八重子　「ただいま」
母　「おかえり」
八重子M　「だけど私は、今も同じ恵庭で、同じ家で暮らしている。そしてまりこは、あれから一度も恵庭に帰ってきていない」

食卓の音。

母　「お父さん、いよいよね」
八重子　「いよいよ？」
母　「定年退職。そしたらたくさん時間もできるから一緒に温泉とか行こうかな」
八重子　「ああ……いいんじゃない」
母　「今まで頑張ってきたんだから、家でゆっくりしてもらいたいわ」

食器を置く音。

八重子　「……そしたらもう、お母さん家で一人じゃないんだ」
母　「え？」
八重子　「ううん」

食卓の音。

八重子M　「ずっと、ずっと私を縛り付けていると思っていた何かが、霧のように消えてしまった気がした。どうすることもできない私は、あの日と同じように立ち尽くすしか無かった」

八重子M　「そんな次の日の仕事終わり」

漁川の流れる音。

八重子　「あら、かなちゃん」
かな　「やっちゃん」
八重子　「学校帰り？」
かな　「うん」
八重子　「どうしたの。漁川なんてぼーっと見て」
かな　「なんかさ、川の音聞いてるとなんも考えなくて済むじゃん」
八重子　「……なんも考えたくないの？」
かな　「そんな感じ」

漁川、轟々と流れる。

かな　「お父さんとお母さんにさ、猛反対されたんだ、留学」
八重子　「あら」
かな　「今まで色んなことに興味を持ってはすぐやめてを繰り返してきて、だから海外に行ったところで途中で飽きてやめたなんてできないんだぞって」
八重子　「そうかあ」
かな　「失敗したらどうしようって頭の中そればっかり」
八重子　「それは……川の音も聴きたくなるね」
かな　「やっちゃんは？」

八重子　「私？」
かな　「何も考えたくないから来たんじゃないの？」
八重子　「……（口真似）漁川は鮭が遡上してくる川で９月頃が最も盛んです」
かな　「え、誰」
八重子　「田中先生」
かな　「ほんとに誰」
八重子　「中学校の頃の先生。急に思い出した」
かな　「わかるわけないじゃん」

笑う二人。
防災スピーカーから「七つの子」

八重子　「駅の方いくでしょ。一緒に帰ろう」
かな　「うん」

歩き始める、二人分の足音。

八重子　「かなちゃんはなんで海外行きたいの」
かな　「……授業でさ、クライストチャーチの写真見て」
八重子　「ニュージーランドの？」
かな　「そう。こんな綺麗な街があるんだって、調べ始めたら行ってみたくなった」
八重子　「恵庭のモデルになった街だ」
かな　「そうそう。個人の家の庭も、公園もすっごい素敵で」
八重子　「海外かあ……あ、かなちゃん」

かな　「なに？」
八重子　「シャケ焼き、食べる？」
かな　「シャケ焼き……」
八重子　「ごちそうするよ」

扉を開く音。

店員　「いらっしゃいませー」
八重子　「どれにする？」
かな　「……チーズ」
八重子　「私はピリ辛ください」
店員　「はーい」

扉を閉める音。

かな　「いただきます」
八重子　「はいどうぞ」
かな　「……美味しい」

二人分の足音。

八重子　「……かなちゃんは、ちゃんと自分のやりたいことがあってすごいね」
かな　「でも今諦めかけてるけどね」
八重子　「諦めかけてるの？」

かな　「かなり瀬戸際かも」
八重子　「瀬戸際かあ」
かな　「うん」
八重子　「……シャケ」
かな　「え？」
八重子　「シャケだよ」
かな　「シャケ？」
八重子　「かなちゃんもさ、帰ってくればいいんだよ」
かな　「え？」
八重子　「海外に行くのか、諦めるのか、それはかなちゃんが決めることだけどさ、もし何かに挑戦しても
　しなくても、辛くなったら帰ってくればいいんだよ」
かな　「……どこに？」
八重子　「恵庭に決まってるじゃん」
かな　「でも私恵庭に家ないし」
八重子　「家だけが帰る場所じゃないよ。私はきっと恵庭にいるし、シャケ焼きもきっとあるし、あ」
かな　「ん？」
八重子　「あとちょん月も」
かな　「ちょん月？」
八重子　「お腹すいた？」
かな　「え、今シャケ焼き食べたばっか」
八重子　「ポークチャップ、行くしかないっしょ？」
かな　「ちょっとやっちゃん食いしん坊すぎ」
八重子　「私はね、辛くなったり悔しいことがあったら昔っからちょん月に行くの」
かな　「一人で？」

八重子　「今はね」

歩き出す二人分の足音。
カッコウの鳴き声。

かな　「やっちゃん」
八重子　「ん？」
かな　「やっちゃん、恵庭にいてね」
八重子　「なに？」
かな　「やっちゃんが私の帰る場所」
八重子　「いつでも帰っておいで」
かな　「うん」

かなが鼻を啜る音。
二人分の足音。

八重子　「遠くの夕陽が、沈みかけに輝いている中を二人で歩いた。長い冬を終えた恵庭には、もうすぐ
　春が来る。すずらんが芽吹きの時を迎えていた」

3章　開花

八重子M　「吉田八重子。やっちゃんと呼ばれたり、八重子さんと呼ばれたり、吉田さんと呼ばれたり。色んな呼ばれ方をして過ごしていくうちに時代は、令和と呼ばれるようになっていた」

カフェの扉を開く音。
入ってくる足音。

太田　「八重子さん」
八重子　「あら！太田さんどうしたんですか？」
太田　「そういえば、いよいよ明日だなと思って、近くまで来たら電気ついてたから覗いたんだわ」
八重子　「ありがとうございます。本当にいよいよ」
太田　「いい物件見つけたんじゃない？」
八重子　「色んな人が協力してくれて……やっと、やっと見つけました」

八重子M　「私は明日、カフェとコミュニティースペースが合体したお店をオープンする」

太田　「それにしても広いねー。ライブとかもできそう」
八重子　「ええ。そんな使い方もできたらいいなって思ってます。色んな人が色んな使い方をしてくれて、それでまたたくさんの人が集まってくれて」
太田　「うん。素晴らしいね。……やっと見つけた、八重子さんの夢か」
八重子　「太田さんも、いよいよじゃない」
太田　「ん？」
八重子　「都市緑化フェア」

太田　「本当大変だったわ」
八重子　「お疲れ様です」
太田　「国が主催してやるイベントってこんなに骨が折れるとはね。分かってはいたつもりだけど、まさかここまでとは」
八重子　「いっつも話してたもんね。大変だって」
太田　「でもさ、その間に一つ、いいことあって」
八重子　「いいこと？」
太田　「実は」

カフェの扉を開く音。

優子　「お父さん」
太田　「ああ、ちょうどいいところに」
八重子　「え……もしかして、優子ちゃん！？」
優子　「八重子さん、お久しぶりです！オープン前なのにお邪魔しちゃってすみません」
八重子　「本当に久しぶり！ずっと東京の大学行ってたよね？」
太田　「今年卒業して、恵庭に帰ってきだんだわ」
八重子　「そうだったの！」
優子　「はい。大学でまちづくりについて勉強してたんですけど、勉強したこと恵庭の街に還元したい！って思ってたら、今年から恵庭市役所花と緑・観光課で働けることになりました」
太田　「なーに言ってんのよ。もう北海道なんて帰らないぞって息巻いてでてったのに、やっぱり寂しくなって帰ってきたんだわ」
八重子　「太田さんこそ何言ってんの！寂しかったのは太田さんでしょ！」
優子　「あはは、でもいい時期に帰ってこれました。都市緑化フェア、横浜とか広島のはみに行ったことあ

ったんですけど、まさか恵庭みたいに小さな街でやれるなんて思ってなかったから」

八重子　「本当にね。お客さん、たくさん来てくれるといいですね」

太田　「きっと来るさ。八重子さんも、オープンガーデン作ってくれたし。薔薇、とっても綺麗だ」

八重子　「ありがとうございます」

八重子M　「全国都市緑化フェア。昭和58年から毎年、全国各地で開催されている花と緑の祭典だ」

八重子　「帰ってきたくなる街」

太田　「ん？」

八重子　「昔、太田さんが言ってました。「恵庭を帰ってきたくなる街にしたい」って」

優子　「ああ、言ってた！」

八重子　「太田さんだけじゃなくて、色んな人が言ってた。そう言って街を花でいっぱいにしたり、お祭りを開いたり、便利な施設を作ったり」

太田　「そうね。俺は自分が楽しいって思えることやってただけだけどね」

八重子　「このお店も、色んな人の帰ってこれる場所になるといいなあ」

優子　「そうなりますよ」

太田　「うん、なるさ」

八重子　「はい」

太田　「じゃあ八重子さん、明日、来るからね」

優子　「私も！」

八重子　「お待ちしてます」

カフェの扉が閉まる音。

八重子、手を叩く。

八重子　「私も帰りますか」

電気を消す音。

八重子の足音。

八重子M　「過ぎていった。本当に色んなものが、人が、季節が、私の前を過ぎていった。まりこと二人、歩いた砂利道は、今はコンクリートで舗装されている」

×　×　×

まりこ　「やっちゃん、帰ろ」

八重子　「まりこ」

まりこ　「本当に何もないよね、この街」

八重子　「そんなことないよ。まりこ、帰ってきてないから知らないでしょう」

×　×　×

吹き抜けてゆく風。

カッコウの鳴き声。

スズメの声など、朝の音。

八重子　「うん！いいお天気」

客1　「八重子さん、おはよう」
客2　「吉田さん、いよいよだね」
太田　「『オープンスペース　縁』いい名前だね」
優子　「お父さんたち待ちきれなくて、もう行くぞって！すみません、朝早くから」
太田　「いいべや少しくらい」
八重子　「太田さん！皆さんも、ありがとうございます」

ドアベルの音や、人々がガヤガヤと賑やかな音。
ギターの演奏も遠くから聞こえる。

太田　「オープン初日、大盛況だね」
八重子　「はい。ずっと働いてたカフェの常連さんとかご近所さんとかみんな来てくれて、ありがたいです」

カフェの賑わいの音、少しずつ小さくなる。

八重子　「ありがとうございました。さて、と」

足音。
カフェの扉を開く音。

八重子　「あ、すみません、今日はもう閉店で……」
かな　「やっちゃん」
八重子　「あ……」
かな　「覚えてる？」

八重子　「もしかして……かなちゃん？」
かな　「うん。久しぶり！」
八重子　「すっかり見違えちゃって……」一瞬誰かわかんなかった」
かな　「やっちゃんがお店オープンするってSNSで見たから来ちゃった。空港からまっすぐ来たからこんな時間になったけど」
八重子　「空港からって今どこに住んでるの？」
かな　「ニュージーランド。今向こうで働いてるの」
八重子　「そうだったの」
かな　「やっちゃん」
八重子　「ん？」
かな　「ただいま」
八重子　「……うん。お帰りなさい」

ティーカップを置く音。

八重子　「へぇー。かなちゃんそんな仕事してるんだ」
かな　「うん、なんとかね。あ、そろそろ行かなきゃ。お茶ご馳走様」
八重子　「忙しいのにどうもね。駅まで送ってくよ」

スーツケースを転がす音と足音。

かな　「恵庭、もうほんとすごい久しぶり」
八重子　「久しぶりの恵庭はどうですか？」
かな　「なんかさ、あったかいよね」

八重子　「もうすぐ夏だからね」

かな　「違う違う、なんか……いつでも帰ってきてもいいし、帰ってこなくても私たちはここで楽しく暮らしてるから心配しないでいいよって言ってくれてるような、そんな感じ？」

八重子　「ふーん」

防災スピーカーから「花のふるさと」

かな　「派手な観光名所があるわけでもないし、学生さんたちが遊べる場所があるわけでもないけどさ」

八重子　「うん」

かな　「都市緑化フェアっていうの、やるんでしょ？そんな風に、住んでる人たちが自分達が住んでて楽しい、心地いいって思える街にしていってるのが素敵だなって思う」

八重子　「うん、そうだね」

駅ホームの音。

かな　「ホームまで送ってくれてありがとう」

八重子　「ううん。またいつでも帰ってきてよ」

かな　「うん。帰ってきます」

列車が入線してくる。

かな　「じゃあやっちゃん……またね」

八重子　「うん」

かな　「お店、頑張ってね」

八重子　「ありがとう」

ＪＲの扉が締まり、出発する。

八重子　「過ぎてゆく。皆、この街なんて気にもとめず、ただの通過点として、過ぎてゆく。札幌から新千歳へ。昭和から令和へ。冬から春へ。全て流れ、過ぎてゆく。どこかへ過ぎゆく人々がいつかふと帰りたくなった時、いつでも温かく迎えてくれる、そんな場所が、ここ、恵庭なんだと咲き誇るスズランを見て、そう思った」

了

演劇作品〈鷹栖篇〉

『ヒヅメとイナナキと不思議な沼』

作／戸澤亮

「なにもないけど、なんでもある」

戸澤亮

北海道に生まれ北海道に育った私は、恥ずかしながら鷹栖という町に訪れたことはこれまで一度もなかったが、それが逆に鷹栖町をチョイスするきっかけだった。

鷹栖で取材を始め私が最初に思った感想は、誤解を恐れずに言うなら「なにもない」だった。スーパーもない。カラオケもない。ファーストフード店もゲームセンターもない、もちろんクラブもないし、ビックカメラもない。大きい建物はほぼない。じゃあ何があるのだろうか。0から始まる物語に私はワクワクとスリルを感じた。

鷹栖を訪れて町の人々の話を聞き始め、最初に知った物は「馬具」だった。

なんでも鷹栖の郷土資料館に所蔵されている馬具が国の登録有形民俗文化財に指定されるかもしれない、とのことで、認可されれば道内初の登録となるらしい。

なぜ鷹栖にそこまでの馬具が存在しているのか。

▲演出中の戸澤さん

道内屈指の米どころである鷹栖にはかつて農耕馬が1500頭以上いた。「馬は家族」。郷土資料館でお借りした資料に記されていた印象的な言葉であるが、沢山いた馬はトラクターなどの機械の導入によって一気に姿を消し、今では一頭もいない。

「あんなに馬に頼って生活していたのに、人間の道具のように扱ってしまっていたのではないか」そう思う町民も少なくはなかったようだ。その思いをしたためた馬にまつわる話だけで一冊分の郷土誌が作られるくらいである。

それが時を経て、国の登録有形民俗文化財として認められるということにロマンを感じた私は、それを創作する物語の幹とすることにした。

さらにアイディアを求めて町の取材を続けていると「龍神沼」に出会った。町の外れの山奥にある町民でも知る人ぞ知る沼で、生い茂った草木を掻き分けて歩き進まないと出会えない沼である。そこには小さな神社があり、倒れてしまっている鳥居、二股の木の根元に蛇紋石と鏡、社に御神体があった。人の気配などなく、聞こえるのは虫や鳥の声、沼の水が跳ねる音、風で揺れる木々の葉……形容し難いのだがかなり神秘的なスポットで、創作の感情が揺さぶられる何かがそこにはあった気がした。

鷹栖の夜は暗い。見上げると夜空いっぱいに星が瞬く。そういえば、中心部に住んでいるとあまり星を見ることがない。こんなに夜空を眺めたことはあっただろうか。

他にも鷹栖の様々なモノや景色との出会いを重ね、それらをミックスして物語を創作した。

忘れていけないのは出演者との出会い。ワークショップを開催し、出演者を募り、そのほとんどが舞台未経験の町民。その方々のフレッシュな演技やポテンシャルがあって物語が完成した。

そして上記の取材やここに書ききれない出来事や出会いは決して私一人では成し得なく、町の方のあたたかい協力があってこそであった。

一見なにもない町には、都会にはないものがたくさんあったのだ。

改めて、鷹栖町のあたたかい出会いに感謝します。

「鷹栖のそこぢからは時空を越える」

礒野聡美（劇団isono代表）

地域にまつわるお話を丁寧に作って行くことができて、すごく有意義な取り組みでした。特に、町民の方から「町の歴史を改めて知ることが出来た」「町にまつわるものがたくさん出てきて嬉しかった」「演劇にはあまり興味がなかったが、観終わって面白いと感じた」など、好意的な意見をたくさんいただけたのがよかったです。戸澤さんの視点で切り取られた鷹栖町は、私にとっても新鮮でしたし、町のみなさんにとってもそれぞれに発見があったようです。

出演者の体調不良で日程を延期する事態となりましたが、「鷹栖の馬具」が登録有形民俗文化財に認可されたという報道の翌日を公演日としていたので、より作品を楽しんでいただけるタイミングで上演できたと思います。

衣装・音響効果・小道具などの制作も町民で行いましたが、クオリティの高いモノを何でもスっと作れてしまうのが鷹栖町民の素晴らしいところです。それはお芝居に関しても同じで、（本当に未経験ですか？）と思うような方がたくさんいて、また、出演したい、という方がこれだけ集まってくれるのも、メロディーホールがあることも、本当に恵まれた環境だと思います。

こちらは劇団と名乗っているものの、初舞台の方も多く、ほぼ未経験者ばかりの団体なので、台本が予定時期に上がってこなくてかなりやきもきしていました。「間に合うかどうか不安」という参加者の声もありながらやっていたので、11月中ぐらいまで、団体の代表としては結構しんどかったです。

また、補助金を町以外からいただいたり、脚本演出を外部の方に依頼したりするのが初めての試みだったので、事前に何を確認すべきか、という事務的な部分に関してかなり反省点が多いです。このプロジェクトが続いていくのかどうかわかりませんが、今後もそういったことに慣れていない人間が担当になることが往々にあると思いますので、もう少し丁寧かつ具体的な説明をお願いしたいです。

今後、札幌演劇シーズン実行委員会にお願いしたいことは、芸術の価値を高める活動をしていただくことです。今回、中学生以上５００円としましたが、それでも中高生は無料にできないのかという声がありましたし、もし大人２０００円だったらここまで集客できなかったと思います。現状、地方で生の舞台を見る機会は少ないですし、良くも悪くも安く観劇できることが多いです。再演してほしいとの声もいただきましたが、正直無償では厳しいですし、先が続かないので、観客を育てる活動に期待します。（どのような活動をされているか、私の勉強不足もあると思いますが、一地域の住民として感じていることでした）

色々と書きましたが、出演者の方にもお客様にも楽しんでいただけたのでよかったですし、自分自身も取り組む中ですごく成長できました。このような機会をいただき、本当にありがとうございました。

▲鷹栖「ヒヅメとイナナキと不思議な沼」チームの皆さん

鷹栖町まちLabo企画
劇団isono第２回“演劇”公演

『ヒヅメとイナナキと不思議な沼』
公演概要

●日　　時／2024年1月20日（土）13:30開場　14:00開演
※2023年12月17日（日）の公演予定でしたが、出演者の体調不良により、2024年1月20日（土）に延期しての公演となりました。
●会　　場／たかすメロディーホール（鷹栖町南２条４丁目１－１）
●料　　金／前売・当日500円（小学生以下無料）
●来場者数／219人

主催／札幌演劇シーズン実行委員会、劇団isono、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会
後援／鷹栖町

『ヒヅメとイナナキと不思議な沼』
inたかすメロディーホール（2024.1.20）

●演劇作品　鷹栖篇

『ヒヅメとイナナキと不思議な沼』

作・戸澤　亮

地元を離れ都心の大学に通う巻野ヒヅメに知らされる突然の祖父の危篤。そこに祖父が飼っていた農耕馬イナナキが化身となり現れる。不思議な沼が過去と現在をつなぐ、摩訶不思議・馬具ファンタジー演劇。

【出演】

巻野ヒヅメ……唐川貴帆
巻野タヅナ……渉里美香
イナナキ……礒野聡美
巻野サトル……岩野浩昭
ハマノ……大橋一夫
ウワバミ……片山兵衛
フクダ・村人・大学生1……鈴木俊也
沼神・店員・記者……山田直美
医者・鯉・農協の人……川原允
小ヒヅメ・小学生1……片山ちか
ユメ・小サトル……桜井紫夕
ミク・小学生2……桜井緑空
カコ・小ハマノ……太田萌絵
大学生2・黒ヘビアンサンブル……チャールトン・ソフィ

【スタッフ】

脚本・演出　戸澤　亮
照明・音響　たかすメロディーホール
舞台監督　萬章保(IMAGE)
音響効果　岩野浩昭
衣　　装　渉里美香
衣装制作　三浦 美代子
小道具　佐藤 絢香
票券制作　片山 兵衛
楽曲制作　おしりマグナム
宣伝美術　戸澤　亮
協　　力　鷹栖町郷土資料館
側彰さん
舟根八十八さん
狩野李彩さん
田中寺
企画制作　劇団isono

▲農耕馬が切り拓いた鷹栖の大地

◆舞台美術について

舞台上手前から舞台中央奥にかけ、平台が緩いピラミッド状に積まれている。
山台頂上は高さ3尺。割幕で挟まれており、沼のほとりと見立てる。
山台奥にはマットが敷いてあり山台頂上から、沼に飛び込めるようになっている。
山台中腹部上手・下手に幅6尺のジョーゼット幕が垂れ下がっており、幕越しの透かして見えるアクティングエリアとして使用する。

開場中、『沼のほとり-夜』がかかっている。
照明：夜の沼
音響：開演時間になり舞監ＣＵＥでハマノ影ナレ

ハマノ　「本日は、劇団isono第2回公演『ヒヅメとイナナキと不思議な沼』にお越しくださいまして誠にありがとうございます。開演に先立ちましていくつかお願いがございます。本公演の録音・録画は固くお断りしております。携帯電話・スマートフォンなど音の鳴る電子機器は電源からお切りいただくか、音の鳴らないよう機内モードに設定していただきますようお願いいたします。また、スマートウォッチなどの光はお客様の観劇の妨げなになる恐れがございますので、電源を切るか、まあ、光らないようにしていただければいいんですけど、そういう設定とかあるんですか？私スマートウォッチ持ってないんでわからないんですけど。なんか要望が多いな！って思われたくないので、もう、最悪、大丈夫です。あのー最悪ね？音が鳴っても光っても、まあ、死ぬわけじゃありませんし（笑）はい、すみません」

音響：ハマノのナレの途中で『沼のほとり-夜』F・O
ハマノ影ナレ中に小学生3名板付き。（小ヒヅメ・ミク・ユメ）上手側にてきて座る。それぞれ絵を描いている。
照明：小学生3名板付き後→郷土資料館照明（セピア）F・I

プロローグ

影ナレからシームレスに郷土資料館に舞台が変わっている。

小ヒヅメ　「ハマさん話長くない？」

ハマノが入ってくる。

ミク　「ハマさん、今わたしたち絵描いてるんで」
ハマノ　「えー皆さんは、わが町に伝わる沼の伝説を知っていますか？町のメインストリートから数キロメートル離れた山奥に今もある、底無し沼のお話です」
ユメ　「ぬま？ぬまなんてあるっけ？」
ハマノ　「あるんです。…昔、昔。屈指の米所である我が町の農作業が、まだ、馬とともにあった頃。我が町には馬にまつわる道具『馬具』がたくさん存在していました。とある集落に、先祖代々受け継がれてきた馬具・刮削刀がありました」
ミク　「かっさくとうって何ですか！」
ハマノ　「刮削刀は馬の足の爪を削る道具ですね。その刮削刀は特別な、黄金に輝く刮削刀だったのです！」
ユメ　「おうごん！？」
ハマノ　「その頃、集落では、農家の馬たちが次々に病にかかり、死に至る災いが続くようになっていました」
ミク　「かわいそ～」

下手から村人が入ってきて中央奥に板付き。祈っている。

ハマノ　「考えあぐねた人々は底無し沼のほとりに祭壇を作り祈ると、沼の神様が現れました」

照明：沼の照明ＩＮ（郷土資料館照明はＯＵＴ）

音響：『沼の神様』ＩＮ

沼神様　「やっほ〜！呼んだ？」

村人　「ああ、沼の神様！この黄金の刮削刀を差し上げます！どうか災いをなくしてください！」

沼神様が刮削刀を受け取る。

音響：『ポチャン』ＩＮ

照明：沼の照明ＯＵＴ、郷土資料館照明復帰

ハマノ　「すると災いは収束し、その集落は平穏を取り戻しましたとさ…おしまい」

ミク　「ふーん、初めて聞いた」

小ヒヅメ　「その沼しってる」

ユメ　「え、知ってるの？ヒヅメ」

小ヒヅメ　「山奥の底無し沼でしょ？お母さんと、たまに行きます！」

ミク　「こわ！そんなとこ何しにいくの？」

小ヒヅメ　「なんかお母さんは星見てる」

ハマノ　「ところでみんな絵かけた？担任の先生に提出してね」

ミク　「ハマさんがきゅうにかたり出したんじゃん！」

ハマノ　「ごめんね、馬具の絵を描くっていうから」

ユメ　「かけましたー」

ハマノ　「お、見せて見せて」

ミク　「私もかけたー」

ハマノ　「何これ」

ユメ　「ハマさん」

ハマノ　「なんで！」

ミク　「郷土資料館の中のものだったらなんでもいいっていうから」

ハマノ　「郷土資料館の中のものだったらなんでもいいって言ったけど、馬具の中でだから！私馬具じゃないから」

ミク　「ばぐではないけど、バグってるみたいなところあるじゃん！」

ハマノ　「え？どういう意味？」

ユメ　「ヒヅメ！放課後、練習だからね！」

小ヒヅメ　「うん」

ハマノ　「ちょっと知らないよ！先生に怒られても！」

ミク・ユメは上手奥にハケていく。

小ヒヅメ　「かけました」

ハマノ　「どれどれ（映す）これは…」

小ヒヅメ　「かっさくとう！」

ハマノ　「うまいね」

小学生ヒヅメはハケようとする。同時に、大人ヒヅメが下手白幕前に板付き

ハマノ　「ヒヅメちゃん」
小ヒヅメ　「はい」
ハマノ　「おじいちゃん、元気？」
小ヒヅメ　「元気すぎて困ってます！」
ハマノ　よかった。よろしく伝えておいて」

小ヒヅメとハマノハケる。
照明：下手白幕前サス（郷土資料館照明はＯＵＴ）

ヒヅメ　「私が祖父によろしく伝えたかどうかは覚えていない。でも、幼少期に母がその沼に連れて行ってくれたことは、１０年以上経った今でもよく覚えている」

音響：『全力少女』ＩＮ
照明：舞台手前セピアＩＮ
上手から小学生４人（小ヒヅメ・ミク・ユメ・カコ）出てくる。ラジカセ持ってくる。冒頭を踊る４人。カコがラジカセを止める。
音響：『全力少女』Ｃ・Ｏ

カコ　「とめま～す」
三人　「……」
カコ　「ん～。振り、まちがえてるよね？自覚ある人？」
ミク　「ヒヅメちゃん」
小ヒヅメ　「えっ、わたし？」

カコ　「はあ～…」
ユメ　「自分で気づいてないんだ」
ミク　「ミク、いつも言ってるじゃん。ここの後は、こう！でしょ」
小ヒヅメ　「え、でも、カコちゃんのその前のコレが一拍おくれてると思うんだけど」
カコ　「ていうかさ！なんかバランス？がよくないと思う」
小ヒヅメ　「バランスって？」
カコ　「わたしたちって４人じゃん？ももクロって６人じゃん」
ミク　「あ～メンバー追加する？」
小ヒヅメ　「え、せっかく立ち位置おぼえてきたのに…」
カコ　「あ！そういえばリサちゃんグループが入りたいって言ってた！」
小ヒヅメ　「え、でもさ、リサちゃんグループって３人じゃん？」
ミク　「てことは…７人だから、一人余っちゃうか～」
ユメ　「じゃあさ！オーディションやろうよ！」
カコ　「ユメちゃん！天才！？」
ミク　「めっちゃいいじゃんそれ」
小ヒヅメ　「……」
カコ　「今日はもうやめよ～」
ユメ　「ミクちゃんいっしょにかえろー」

ミク・ユメ・カコはラジカセを持って上手にハケる。
下手白幕前に大人ヒヅメ板付き。様子を見ている。
照明：下手白幕前サスＩＮ

小ヒヅメ　「……（しばらく踊っている）」

ヒヅメ　「（上手に向かって）ももクロは当時6人だったけど、その後すぐ5人になって、今はなんやかんやあって4人編成じゃあ～い！！！」

小ヒヅメ舞台中央奥へ移動。下手から入ってきたタヅナと合流する。

ヒヅメ　「毎日放課後に集まってアイドルの真似事に勤しむただの有志団体を子ども心ながらにしゃらくせえ！と可愛げなく放棄し帰宅した私を見かねたのか、その日も母は私を星を見に連れて行ってくれた」

音響：『沼のほとり-夜』ＩＮ

照明：下手白幕前サスＯＵＴ、全体セピアから夜の沼

ヒヅメ　「（歌う）こどもがかえった　あとからはまるいおおきな　おつきさま」

小ヒヅメ　「（続きを歌う）ことりがゆめを　みるころはそらにはきらきら　きんのほし」

タヅナ　「心に響くねえ、ヒヅメの歌は」

小ヒヅメ　「お母さん」

タヅナ　「なした？」

小ヒヅメ　「私アイドルやめたんだ」

タヅナ　「あら、もう引退？百恵ちゃんだってマイクを置いたのは21だよ。あんたまだ11でしょ」

小ヒヅメ　「なんかオーディションやるんだって。リサちゃんグループと合同で」

タヅナ　「リサちゃんグループかあ…やらないの？」

小ヒヅメ　「わたし絶対落とされるもん」

タヅナ　「そんなのやってみないとわかんないしょ」

小ヒヅメ　「お母さん」

タヅナ　「なした？」

小ヒヅメ　「なんでいつもここで星見てるの？」

タヅナ　「ここからだとよく見えるからさ」

小ヒヅメ　「ふうん」

タヅナ　「お母さんがヒヅメくらいの歳の頃にねえ、おじいちゃんがよく連れてきてくれたんだ」

小ヒヅメ　「へえ～」

タヅナ　「あとホラ、沼に月が映って綺麗でしょ」

小ヒヅメ　「……（覗き込む）」

タヅナ　「気をつけな！落ちると死ぬよ」

小ヒヅメ　「こっわ。……ねえ、この沼の伝説知ってる？」

タヅナ　「伝説？」

小ヒヅメ　「なんか黄金の馬具？の話。今日ハマさんに聞いたんだ」

タヅナ　「馬具って馬の？…おじいちゃんに聞いてみたら？」

照明：上手白幕前サスＩＮ

音響：『沼のほとり-夜』Ｆ・Ｏ

タヅナと小ヒヅメは下手に移動する。

ヒヅメ　「正直、星なんぞに微塵も興味のなかった私には、少し退屈な時間だったが、私の描いた絵が通知表の表紙になった時も、プール授業で私だけビート板を使わないと泳げなかった日も、母は底無し沼のほとりに連れて行ってくれた。夜に母と二人で過ごすその時間は、なんか温かくて、好きだった」

照明：下手山台1～2段目セピアＩＮ

巻野家。上手から現れる巻野サトル

サトル　「伝説ねえ、知ってるよ。昔はな、農家に馬はなくてはならない存在だったんだよ。千五百頭はいたけどなあ、今じゃ全部機械だべ。昔はプラウを引くのも馬、ハローをかけるのも馬。冬は木材の運搬もしたし、なんでも馬だ。馬は人間の五倍の力があるって言われててな、馬がいないと仕事にならん」

小ヒヅメ　「へえ、そうなんだ。うちにもいたの？馬」

ヒヅメ　「（モノローグ）私の家は先祖代々米農家であった」

サトルメ　「……もちろんいたよ…でもなあ、じいちゃんが子どもの頃にいなくなっちまった。町に千五百頭はいたけどなあ、今じゃ全部機械だべ。昔はプラウを引くのも馬、ハローをかけるのも馬。冬は木材の運搬もしたし、なんでも馬だ」

小ヒヅメ　「うちにもいたんだ！うま！」

サトル　「馬は人間の五倍の力があるって言われててな」

小ヒヅメ　「じいちゃん、さっき聞いたよ」

サトル　「そうかそうか、ほんでヒヅメ、アイドル活動の方は順調か？」

タヅナ　「父さん、ヒヅメもうアイドルやめたんだと」

サトル　「あれえ、なしてさ、じいちゃんヒヅメの親衛隊になるため勉強してんだよ？」

小ヒヅメ　「もうやめたの！」

サトル　「タヅナ！あれ見してやれ、あれ」

タヅナ　「何さ」

サトル　「あれよ、あの、母さんのアルバム」

タヅナ　「いいって、母さんの聖子ちゃんカットでしょ？何回も見たべさヒヅメ」

サトル　「そうか…ほいで、つぎ何やる？ヒヅメ。農家か？」

タヅナ　「父さん」

小ヒヅメ　「うま！」

サトル　「うま？」

小ヒヅメ　「馬のしごと！」

サトル　「……そうか、ヒヅメのやりたいことやればいい」

タヅナ　「思いつきでしょ、どうせ」

小ヒヅメ　「違うし」

サトル　「ヒヅメ…昔、馬はな、家族同然だったんだよ」

ヒヅメ　「（モノローグ）祖父はその日、馬について沢山教えてくれた。私は一人っ子だったが、祖父も母も、私のやりたいことを否定したことはなかった」

照明：全体煌びやかな明かり。上手白幕前サスはアウト

音響：『軽快な音楽』ＩＮ

ヒヅメ　「そして！時は現代。田舎から都会に出た私、巻野ヒヅメは家業の米農家を継がず、都会の大学に進学した！しかし巻野ヒヅメ一生の不覚。都会の誘惑に誘われた！都会にはスタバもクラブもビックカメラもあった。常に街がスクラップ&ビルドしていて自分が世界の最先端にいる気さえした」

スタバの店員が現れる。

スタバ店員　「いらっしゃいませー店内でお召し上がりですか？」

ヒヅメ　「take outで！えっと～ストロベリー&ベルベットブラウニーモカの、ベンティで、ホワイトモカシロップに変更。あ、エスプレッソ抜いてください」

スタバ店員　「お待たせしました～！（渡す）」

ヒヅメ　「スタバならイオンにあるだろというクレームは受け付けていない。スタバは独立店舗型でこそ魅力

を発揮するのだ。自己肯定感爆上がりなのだ！」

スタバの店員はハケる。

音響：『スマホのＬＩＮＥ音』

ヒヅメ　「あい？今？今は地下歩行空間を往復してる。うん？特に意味もなく。え？飲みからのカラオケ？行く行く！明日三講からだし余裕余裕！」

音響：『カラオケ』ＩＮ

大学生下手から入ってきてひとしきり盛り上げ下手にハケていく。

照明：大学生が去っていくと共に煌びやかな照明Ｆ・Ｏ→舞台中央手前明かり

ヒヅメ　「（えずく）ヴォオエ…」

音響：『スマホのＬＩＮＥ音』Ｃ・Ｉ

照明：下手白幕前サスＩＮ

タヅナが下手幕前に板ついており、ヒヅメと電話をする。

タヅナ　「ヒヅメ？」

ヒヅメ　「…どした？」

タヅナ　「あんた、次いつこっち帰ってくる？」

ヒヅメ　「え、うーん…なんで？」

ヒヅメ　「いや、おじいちゃんの具合、よくなくてね」

ヒヅメ　「ああ…うん」

タヅナ　「忙しいだろうから、あんまり気にしなくていいけども。たまには連絡よこしなさい」

ヒヅメ　「うん、近いうち、顔出すよ」

タヅナ　「体に気をつけるんだよ」

照明：下手白幕前サスＯＵＴ　タヅナはハケる。

ヒヅメ　「大学から足が遠のいていたこともあって、私は実家に帰るのが億劫になっていた。そんな中でも、実家から送られ続ける、大量の米が虚しかった…そういえば、都会にはなんでもあるが、星はあまり見えなかった」

音響：『沼の神様』Ｃ・Ｉ

照明：中央手前明かりＯＵＴ→中央奥、薄暗い明かりＩＮ

ヒヅメはハケる。沼の世界になる。

音楽の中、沼神様、その使いの鯉がダンボールを持って板付きする。

沼神様　「あ～～～～～～！」

鯉　「沼神様、どうされました？」

沼神様　「ひまじゃ」

鯉　「沼神様」

沼神様　「ひますぎるぞお」

鯉　「沼神様。沼、なので」

沼神様　「ひまだからさ、さまよえるたましいと遊ぼうかな」

鯉　「彷徨える魂、ですか」

沼神様　「うん（手を叩いて鳴らす）」

照明：両サイド白幕（上手ウワバミ・下手イナナキ）シルエット照明ＩＮ
音響：『沼の神様』Ｃ・Ｏ

鯉　「彼らは…この沼で命を落とした彷徨える魂たち！」
沼神様　「おまえらー！」
影たち　「うおおおお！」
鯉　「すごい。魂が共鳴している」
沼神様　「生きかえりたいか～！」
影たち　「うおおおお！」
鯉　「コール&レスポンスしとる」
沼神様　「んじゃ、そっちからどうぞ」
ウワバミ　「ありがとうございます…私は、黒蛇です」
鯉　「うわ、ヘビだ」
沼神様　「黒ヘビよ、なぜこの沼で死んだ」
ウワバミ　「私は、捨てられたのです」
沼神様　「捨てられた？」
ウワバミ　「はい。私の家族は母も兄弟も、みんな白いヘビでした。黒い私は嫌われていたのです。私を見た者は皆、不快な顔をしました。口を揃えて不幸になると言いました。ついに家族にも捨てられた私は、この沼に身投げしたのです」
鯉　「かわいそ」
沼神様　「それで、よみがえってどうしたい？」
ウワバミ　「そうですねえ強いて言うなら…復讐、ですかねえ…シュ～ッシュッシュッ」
鯉　「うわ、めっちゃ悪いヤツっぽいな」

沼神様　「黒蛇よ、復讐は、いっときの快楽にすぎんぞ」
ウワバミ　「一度死んだ身なので」
沼神様　「ふーん、じゃ次、きみ」
イナナキ　「私は…馬です」
鯉　「馬？なんで馬が沼に？」
沼神様　「馬よ、お前はなぜこの沼で死んだ？」
イナナキ　「私は昔、農耕馬として農家に飼われていました。しかしある日、この沼で溺れてしまいまして…」
ウワバミ　「シュ～ッシュッシュッシュ。鈍臭い馬もいたもんだ」
沼神様　「それで、よみがえってどうする」
イナナキ　「…わかりません。でも私が死んで時が経った今も、沼のほとりで、私を想う声が聞こえるのです。呼ばれている気がするのです」
ウワバミ　「シュ～ッシュッシュッシュ」
イナナキ　「おいヘビ！シュッシュシュッシュうるさいな！」
ウワバミ　「人間に道具として利用された馬がな～に感傷に浸ってるのだ。馬糞臭くてたまらんわ」
イナナキ　「違う！私たちは家族だ！」
ウワバミ　「あ～臭い臭い。馬糞くさい」
イナナキ　「はあ～？言わせてもらいますけどねえ、お前らだってよくとぐろ巻いてうんこみたいなフォームになってんだろ！なんなんだあれ気持ち悪い」
ウワバミ　「あれは敵から身を守るためです～理にかなったフォームなんです～残念でした馬糞野郎～」
イナナキ　「うるせーとぐろうんこ！」
ウワバミ　「一本うんこ！」
鯉　「やめなさい！沼神様の前だぞ」
沼神様　「じゃあそんなうんこくんのためにとっておきのものがあるから」

鯉1はダンボールの中身を広げる。

イナナキ「それは？」
鯉「これは今までこの沼に落とされた人間の道具だ」
沼神様「はるか昔、疫病を鎮めるために人間がこの沼に投げ捨てた。それからことあるごとに人間はなにかしらのものをこの沼に投げ込んでくるのだ。奉納ってやつだな」
イナナキ「へえ」
沼神様「この人間の道具を使えば現世によみがえることができる」
イナナキ「すごい！そんなことができるんですか？」
沼神様「あのーなんか？魔力的ななんかが？あるからさ？知らんけど」
ウワバミ「知らんのかい！あんた神だろ」
鯉「じゃあこれ！欲しい人～？」
イナナキ「なんですかそれ」
鯉「これは…レッドブルの缶だね」
イナナキ「…結構最近のものもあるんですね」
沼神様「なんかっこいいからとっておいた」
ウワバミ「いらね。ゴミじゃん」
鯉「はい、じゃあこれ！」
ウワバミ「ん、なんだそれ」
鯉「鎌かな？」
イナナキ「あっ鎌型蹄刀！」
鯉「かまがたていとう？」
イナナキ「馬の爪の手入れに使う馬具です！」

ウワバミ「え、欲しい欲しい！なんかかっこいい！」
鯉「これもあるよ」
イナナキ「それは？」
鯉「『写るンです』」
ウワバミ「うわ～エモい！いいなあそれ」
鯉「これ、すでに何枚か撮られてるから、現像したらその写真も見れちゃうよ」
ウワバミ「エッモ！めっちゃエモいなそれ！！」
鯉「へどのくせしてエモいとか言うな。最後はこれ」
イナナキ「それは…」
沼神様「これはねえ～思い出ぶかいなあ」
イナナキ「黄金の刮削刀！」
沼神様「あ、知ってるー？有名なんだ。やっぱり」
ウワバミ「黄金の刮削刀だと？なんだ？ただならぬ力を感じるぞ…」
イナナキ「沼神様！良ければその刮削刀、私に…」
沼神様「いいよ」
イナナキ「か、軽い！ありがとうございます」
ウワバミ「え、おい！私も！私も欲しい！」
イナナキ「感謝します。この足でもう一度地上を走ることができるんですね」
沼神様「うん。化身となってね！」
イナナキ「化身？」
沼神様「さあ魂を解き放て！この沼は時空を超えるのだ！」

照明：手白幕後ろ（イナナキシルエット）ＯＵＴ
音響：『イナナキの影消える』ＩＮ

ウワバミ「おい、待て！」
鯉「お前はこれ？」
ウワバミ「いや、それはエモいけど！かっこいい方をお願いします！」
鯉「レッドブル？」
ウワバミ「違う！鎌！鎌のやつ！」
沼神様「オッケーじゃいってら～」
ウワバミ「なんか軽くな～い！？」

照明：上手白幕後ろ（ウワバミシルエット）ＯＵＴ。
音響：『ウワバミの影消える』ＩＮ→『沼の神様』Ｆ・Ｉ

鯉「行っちゃった。…沼神様。こんなことして大丈夫なんですか？」
沼神様「大丈夫大丈夫、わたし神だぞ？」
鯉「そうですけど…」
沼神様「ほら、信じる者はなんとかって言うじゃん？…知らんけど」

照明：中央奥ＯＵＴ→上手山台１～２段目明かり。（病院）
音響：『沼の神様』Ｆ・Ｏ
寝てるサトル。隣に座ってるタヅナ。そこにヒヅメが上手奥から入ってくる。

タヅナ「ヒヅメ…」
ヒヅメ「じいちゃんは？」
タヅナ「（首を横に振る）」
ヒヅメ「なんでもっと早く言ってくれなかったのさ」

ヒヅメ「おじいちゃんがね、ヒヅメに心配かけたくないって」
ヒヅメ「そんな…」
タヅナ「ごめんねえ」
ヒヅメ「やだよ！（サトルのそばに駆け寄る）」
タヅナ「ヒヅメ…おじいちゃんはもう…」
ヒヅメ「じいちゃああん」
サトル「おん？」
ヒヅメ「うわあああ」
タヅナ「あ、まだ生きてたか」
タヅナ「びっくりした…」
ヒヅナ「最近死んでるみたいに生きてるから、なんかもう、どっちだかわからなくなっちゃって」
タヅナ「なんてひどい娘なんだ！」
ヒヅメ「おーヒヅメかあ？」
サトル「父さん、寝てなって」
タヅナ「（上手奥から入ってきて）こんにちは～」
医師「ああ、どうも先生」
タヅナ「えっと…」
医師「あ、サトルの孫のヒヅメです」
タヅナ「ああ、ちょっといいですか」
医師

タヅナと医師は下手前エリアに行く。

サトル「べっぴんさんになって…誰かわからんかったわ」
ヒヅメ「ごめんね、全然帰ってこれなくて」

サトル　「ヒヅメ、なんか痩せたんでねえか？ちゃんと飯食べてんのか」
ヒヅメ　「食べまくりだよ。米が無尽蔵に送られてくるから」
サトル　「大学の方はどうなんだ？」
ヒヅメ　「まあ…ぼちぼち」

照明：上手照明ＯＵＴ→下手前照明ＩＮ

医師　「サトルさんですが…」
タヅナ　「はい」
医師　「もう長くありません」
タヅナ　「…はい？」
医師　「今夜が山でしょう」
タヅナ　「ちょっと先生見てました？さっきの父を。ものすごい普段通りですよ!?何なら今すぐ富士急ハイランドに行って『ええじゃないか』に乗せてもいいくらいですよ？知ってます？『ええじゃないか』。日本一怖いジェットコースター。ひねりながら回転するんですよ？『ええじゃないか』。１０回乗せたって死にませんよ。全然、死なねえじゃないか、つって。はっはっは……そうですか……（お辞儀をする）」

照明：下手前照明ＯＵＴ→上手照明ＩＮ

サトル　「田んぼ、大丈夫だべか」
ヒヅメ　「ああ、農協の人がとりあえずなんとかしてくれてるみたいだよ」
サトル　「そうか……今じゃ全部機械だもんなあ。昔は全部馬がやってたんだよ。昔はプラウを引くのも馬、ハローをかけるのも馬。冬は木材の運搬もしたし、なんでも馬だ」

ヒヅメ　「うん。何回も聞いたよ」
サトル　「そうか…なんだかなあ、最近、昔のことばかり思い出すんだわ」
ヒヅメ　「そっか」
サトル　「まあ、ヒヅメの好きなことやればいいから」

照明：ヒヅメに絞る照明（できれば）サトルとタヅナは上手にハケる。

ヒヅメ　「そのあと、じいちゃんは昏睡状態になった。めちゃくちゃ元気だったから、実感が全然湧かなくて、絶対、またすぐに目を覚まして馬の話をしだす気がした。母は保険やら相続やらの手続きに追われ、私は一人、久しぶりにあの沼のほとりに足を運んでいた」

照明：沼のほとり（昼）の明かりＩＮ
音響：『沼のほとり-昼』ＩＮ

ヒヅメ　「こどもがかえったあとからは　まるいおおきな　おつきさまことりがゆめを　みるころは
　そらにはきらきら　きんのほし」

帰ろうとするヒヅメ。
音響：『ブクブクバシャー』ＩＮ→『ＫＡＲＥＤＡＲＥＳＯ』ＩＮ

ヒヅメ　「…ん？」

「バシャー！」という音とともに馬の化身イナナキが出てくる。

イナナキ「ぶはああああ」
ヒヅメ「わーーーーー！」
イナナキ「はあ、はあ…」
ヒヅメ「わーーーーー」
イナナキ「呼んだ？』
ヒヅメ「呼んでねえ！え！？なに！？妖怪！？」
イナナキ「ノンノン！」
ヒヅメ「沼の上に…立ってる！！！」
イナナキ「あなたが落としたのは…」
ヒヅメ「え！？」
イナナキ「この金の刮削刀？それともこの…なんだこれ？なんか…ゴミ？」
ヒヅメ「何も落としてません！（行こうとする）」
イナナキ「待て！ヒヅメ！」
ヒヅメ「…なんで私の名前！」
イナナキ「なんでも知っているよ、巻野ヒヅメ」
ヒヅメ「はあ！？キッショ！」
イナナキ「小学生のとき、君の描いた絵が通知表の表紙になったことも！プール授業で君だけビート板を使わないと泳げなかった日のことも！アイドルになる夢を諦めたことも！コーチャンフォーをベトナム料理屋だと勘違いして恥をかいたことも！アニエスベーのことをずっとアゲインビーと読んでいたことも！」
ヒヅメ「もうやめて！」
イナナキ「私は君をよく知っている」
ヒヅメ「あんた…何者？」
イナナキ「私の名前はイナナキ！巻野家に仕えし馬の化身である！」

照明：全体明かりから沼サス＋中央手前サスにＣ・Ｉ
ヒヅメ「じいちゃんが昏睡状態になったその日、その馬の化身とやらは私の前に現れた。ここから不思議な一日が、こどもの頃憧れたファンタジーのような、高熱を出した時に見る悪夢のような、奇妙で摩訶不思議な一日が始まるのであった」
音響『ＫＡＲＥＤＡＲＥＳＯ』叩き直しで煽ってＦ・Ｏ

1　郷土資料館：ハマノと記者

ハマノ、記者、板付き。
照明：音楽　Ｆ・Ｏで上手側、郷土資料館の明かり
ハマ「これ、あのー明治25年に村ができたんですよ。その時の範囲がこれだったんです。この黒いところね。ところがどんどん入植者が増えてきて、要するにそのー、行政としては機能出来なくなって、で、明治の30年にここ、ここがまず分村したんですよ。あの石狩川あるでしょ？石狩川ずーっと、あのー大雪山の方まで繋がってたんですけども、こっち側の手前、こっちが全部村として明治25年に設置されたんですね。それから…」
記者「あ、ハマノさん、すみません、あのーそれで、馬具は…」
ハマ「ああ、こちらへどうぞ」
記者「あ、はい、すみません」

ハマ　「これですね」
記者　「あ～！こちらが」
ハマ　「蹄鉄ですとか～この装蹄所とか」
記者　「はえ～」
ハマ　「この馬具が今あの－文化庁の方が、登録有形民俗文化財に指定しようってことで去年来られてですね、そこから今、国の文化財審議にはかってるところですね」
記者　「こちらがその登録有形民俗文化財に大方、認可されるだろうと」
ハマ　「ですね。文化庁の方も『よくこれだけのものが残ってましたね』と」
記者　「そうですか。この馬具がその登録有形民俗文化財に認可されれば、なんと、北海道で初の登録有形民俗文化財になるとのことですが…郷土資料館館長のハマノさんとしてはいかがでしょう、お気持ちは」
ハマ　「そうですねえ…開拓の時代から稲作で繁栄してきた我が町の歴史は、農耕馬とともにありましたから、感慨もひとしおです」
記者　「そうですねえ。いやあハマノさんありがとうございました。取材は以上になります」
ハマ　「私これ載るんですか？新聞に（身なりを気にする）」
記者　「『どさんこ新聞WEB』です…ところでハマノさん、ちょっと別件というか、お尋ねしたいことがありまして…」
ハマ　「これがえ～と、大正8年かな。オサラッペ川という川があるんですけども。その川が蛇行してるもんだから毎年のように氾濫して大変だったそうで、これは改修しなければならない！ということで52キロあったその川を、行政に頼らず民間の有志で」
記者　「（頃合いを見てカットインする）伝説について何かご存知だったりします？」
ハマ　「…伝説ですか？」
記者　「はい、底無し沼の伝説について」

照明：上手F・O→全体明かりC・I
音響：『転換音』IN→F・O　ハマノと記者はハケる。

2　道：ヒヅメとイナナキとフクちゃん

ヒヅメとイナナキが下手から入ってくる。

ヒヅメ　「大体の話は掴めたわ」
イナナキ　「そうか」
ヒヅメ　「あなたは、昔ウチで飼ってたイナナキっていう農耕馬で？」
イナナキ　「そうだ」
ヒヅメ　「底無し沼に落ちて死んじゃった」
イナナキ　「うん」
ヒヅメ　「それで、沼の中にあったその黄金の刮削刀の力でヒトの姿になって？」
イナナキ　「馬の化身な」
ヒヅメ　「時を経て現代に甦ったと」
イナナキ　「簡潔な説明、恩に着る」
ヒヅメ　「なるほど。オッケーわかった。じゃ行こう！…とはならんやろ」
イナナキ　「なぜだ！」
ヒヅメ　「だってなんかもうコスプレじゃん！馬娘プリティダービーじゃん！」
イナナキ　「そんな怒るなよ、どうどう」
ヒヅメ　「やかましいわい。あー頭おかしくなりそう。こっちはなあ、じいちゃん昏睡状態なんですよ！」

サトル「そうか…もうちょっと前に来れていたら…」
ヒヅメ「鼻の差でしたね。イナナキさん」
イナナキ「でもサトルの孫に会えて嬉しいよ」
ヒヅメ「ほんでじいちゃんがどうしたのよ」
イナナキ「私の口から言うのは忍びないのだが……サトルの秘密を知っているか？」
ヒヅメ「え、秘密？」
イナナキ「ああ」

フクちゃんが自転車に乗って来る。ウーバーイーツっぽいバッグを背負っている

フク「あれー！」
ヒヅメ「あっ」
フク「うぃ～！巻野じゃ～ん！めっちゃ久々」
ヒヅメ「フクちゃん。何やってんの」
フク「店の配達だよ」
ヒヅメ「え、福田商店って配達始めたの？」
フク「町内限定でな、便利だろ？（スマホを出す）アプリを通して通知が来るんだよ」
ヒヅメ「ほぼウーバーイーツじゃん」
フク「いやあ、おじいちゃん大変なんだって？」
ヒヅメ「ああ、うん」
フク「で……誰？（イナナキを見て）」
ヒヅメ「あ、えっと～」
イナナキ「私は！沼のより甦りし馬の化身…」
ヒヅメ「（制して）だー！大学の！同じ大学の、同期！」

フク「ふーん…おまえ…染まったな！！！」
ヒヅメ「どういうこと！」
フク「あ、やべ、（スマホを出す）注文きた。じゃ！」

フクちゃん、自転車で颯爽と去る。

イナナキ「なぜ嘘をつく」
ヒヅメ「変態だと思われるだけだよ！それ（刮削刀）危ないからしまえ！」
イナナキ「あんまり大きい声出さないでくれ、敏感なんだ」
ヒヅメ「ごめん！」
イナナキ「さっきのは誰だ？」
ヒヅメ「フクちゃんだよ。福田商店の。私のことはわかるけど、フクちゃんのことはわからないの？」
イナナキ「沼に来たことない人のことはわからない」
ヒヅメ「ふーん」
イナナキ「ヒヅメとお母さんが沼でしてた会話に出てきた人はなんとなくわかる」
ヒヅメ「なるほど」
イナナキ「りさちゃんとか」
ヒヅメ「りさちゃん……？」
イナナキ「ほら、いたろ！りさちゃんグループの！」
ヒヅメ「あ～いたっけ？そんなことよりじいちゃんの秘密ってなにさ！」
イナナキ「……ハマちゃんは？」
ヒヅメ「ハマちゃん？」
イナナキ「そう、ハマノ。どこにいる」
ヒヅメ「ハマさんなら…郷土資料館にいると思うけど…」

イナナキ　「案内しろ。私がイナナキだということを証明してやる」

照明：全体に沼明かりをプラス

音響：『おどろおどろしい音楽』ＩＮ　ヒヅメとイナナキははけていく。

3　沼：ウワバミとフクちゃん

沼。音楽と共に黒蛇の化身・ウワバミが鎌型蹄刀を持って沼から出てくる。

ウワバミ　「…シューッシュッシュ…鎌型蹄刀…なんちゅう力だ…しかしあの刮削刀には及ばんか…おのれ、あの駄馬め。黄金の刮削刀は返してもらうぞ、どこへ行きおったイナナキ…」

音響：『おどろおどろしい音楽』Ｆ・Ｏ

フク　「（下手から自転車で入ってくる）こんにちは～福田商店でーす！」

ウワバミ　「あっ、こっちです」

フク　「一人で何喋ってたんですか？」

ウワバミ　「あ、いや別に」

商品を渡すフクちゃん。

フク　「こちらと、こちらですね～」

ウワバミ　「あっすいませんありがとうございます」

フク　「いやあ、こんなところまで届けにきたの初めてですよ～！こんなところに沼なんてあったんすね～！」

ウワバミ　「Pay Pay使えます？」

フク　「すいませんウチPayPayやってないんすよ～」

ウワバミ　「じゃあ現金で」

フク　「あれっすね？初めてお会いしますよね？」

ウワバミ　「ええ、いましがた甦ったもので。シューッシュッシュ（現金を渡す）」

フク　「シュ？…うわ汚ねえ！金！」

ウワバミ　「すまぬ、沼の中で拾ったやつだから」

フク　「え？沼？」

ウワバミ　「我が名は、沼の底より甦りし、黒蛇の化身、ウワバミ」

フク　「変態だ！」

ウワバミ　「シューッシュッシュッシュ」

フク　「今日は変態が多いな。あざっしたー」

ウワバミ　「待て青年。私の他にも変態を見たのか？」

フク　「はい、なんかウマ娘みたいな…」

ウワバミ　「ほう、どこで見た」

フク　「クロス10の方っすね。（スマホ出して）あ、すんません注文きたんで」

ウワバミ　「待て」

フク　「あっ、チップですか？」

ウワバミ　「ああ」

ウワバミはフクちゃんに鎌型蹄刀を突き刺す。

音響：『刺されるフクちゃん』ＩＮ→『おどろおどろしい音楽』Ｆ・Ｉ

ウワバミ　「今から言う私の言葉をよく聞くのだ」

フク　「……」

ウワバミ　「今からお前は私のしもべ。町の住民をみんな蛇にしてしまうのだ」

ウワバミは刺した鎌型蹄刀を抜く。

音響：『鎌型蹄刀を抜く』ＩＮ

フク　「はい。ウワバミ様。シュッシュッシュッシュ（上手に去っていく）」

ウワバミ　「ご苦労様で～す。…イナナキよ、待っておれ…シューッシュッシュッシュ…」

音響：『おどろおどろしい音楽』Ｆ・Ｏ

照明：ウワバミがハケる←全体＋沼明かりからセピアにＣ・Ｉ

4　サトルの過去

別時代（１９６０年）10歳のサトル登場。手に手綱を持っており、先は舞台袖に繋がっていて客席からは見えない。

小サトル　「はあ、はあ…ここまでくれば大丈夫だ」

音響：馬の鳴き声01』ＩＮ

小サトル　「しんぱい すんでねえ、イナナキ。売り飛ばしたりなんてしねえからな」

10歳のハマノが入ってくる。タモを持っている。

小ハマノ　「サトル？」

小サトル　「わー！！」

小ハマノ　「わーー！！」

小サトル　「なんだハマちゃんか…びっくりさせるなよ！」

小ハマノ　「サトルが勝手にびっくりしたんだべ。こんなところで何やってんだ？」

小サトル　「イナナキが売られちまうから、いっしょ に逃げてきたんだ」

小ハマノ　「売られる？なんでさ？」

小サトル　「こううんき 買うためだって父さんが」

小ハマノ　「うんこ？」

小サトル　「言ってねえ。こーうんき！」

小ハマノ　「こーうんき」

小サトル　「のうさぎょう の きかい だ」

小ハマノ　「おー！サトルんとこにも きかい がくるか！」

小サトル　「そうはさせん…なんで きかい なんかのためにイナナキが売り飛ばされなきゃいけねえんだ！イナナキは家族だぞ！父さんも！母さんも！おかしくなっちまったんだ！」

小ハマノ　「そうなのか」

小サトル　「…ハマちゃんはこんなところで何してんだ？」

小ハマノ　「ん？たからさがし だ」

音響：『タモで探る音』ＩＮ
ハマノはタモを使って沼を探る。

小サトル「たからさがし？」
小ハマノ「知ってるかサトル、この沼のでんせつ」
小サトル「ああ、おうごん の かっさくとう だべ？」
小ハマノ「この沼の そこ にあるはずだ」
小サトル「おまえ信じてんの？」
小ハマノ「うん」
小サトル「はんかくせ。あんなのウソにきまってるべや」
小ハマノ「そう思うんなら、そこで指くわえて見とけ」
小サトル「ハマちゃん、やめとけって、そこなし沼だぞ。そもそも そこ がねえんだから見つかるわけねえべ」
小ハマノ「ロマンのねえ男だなあ、そんなのわかんねえ。見つけたらきっと おおがねもちだぞ」
小サトル「……」
小ハマノ「（タモのなかみを見て）なんも入ってねえ」
小サトル「…ハマちゃん、それって、見つけたら こううんき 買えるべか？」
小ハマノ「ああ、そんなもん１００台は買えるんでねえか？家だって夢じゃねえ」

音響：『馬の鳴き声02』ＩＮ

小サトル「……（イナナキを見る）」
小ハマノ「出てこ～い。かっさくと～う」
小サトル「ハマちゃん、俺にまかせろ」

小ハマノ「え？」
小サトル「そのおうごん の かっさくとう、俺が見つける」
小ハマノ「え？何してんだ？」
小サトル「いいか！よく見とけ！男の いきざまを！」
小ハマノ「おい？やめろサトル！」
小サトル「俺はのうかのむすこ！巻野サトル！せんぞだいだい続くひゃくしょうだましい 見せつけてくれるわ～！！！（沼に飛び込む）」

音響：『サトル飛び込む』ＩＮ

小ハマノ「サトルー！」

音響：『馬の鳴き声03』ＩＮ
照明：セピアから手前全体明かり（郷土資料館）にクロスフェード
大人ハマノ、ヒヅメ、イナナキ板付いている。小ハマノは下手奥にハケる。

ハマノ「サトルは底無し沼に飛び込んだ」
ヒヅメ「…馬鹿すぎる」
ハマノ「底無し沼だからねえ、足がつかなくて溺れてしまった」
ヒヅメ「じいちゃん、どうやって助かったの？」
ハマノ「イナナキが助けたよ」
ヒヅメ「え？」
ハマノ「私は目を疑ったよ。飛び込んだサトルを追いかけるようにイナナキが沼に飛び込んだ。サトルはイナナキにしがみつくようにしてなんとか這い上がったが、イナナキは…そのまま沼に沈んでいった」

ヒヅメ　「……（イナナキを見る）」
ハマノ　「馬は家族とよく言うがね、サトルを守るあのイナナキの行動は、子を守る親の姿そのものだった」
ヒヅメ　「そうだったんだ…」
ハマノ　「サトルは悲しみに暮れたよ。自分のせいでイナナキが死んでしまったのだから
　ねえ。私も、ひどく後悔した。あの時私がサトルを囃し立てなければ、サトルは沼に飛び込まな
　かっただろう」
ヒヅメ　「ハマさんのせいじゃないよ」
ハマノ　「サトルもそう言ってくれたよ…。結果、周りの大人たちには二人でイナナキを逃したと嘘をついて、
　沼での出来事は二人の秘密にした」
ヒヅメ　「それがじいちゃんの秘密」
ハマノ　「…この秘密は墓まで持っていくという約束だったが、そうか、サトルが話したのかい？」
ヒヅメ　「え、えっと、そう！」
ハマノ　「彼は……」
ヒヅメ　「あ、あの～大学の！先輩だっけ？」
イナナキ　「同期って言ってた気がする」
ヒヅメ　「そう！そんなかんじです！すいません！変な格好で！」
ハマノ　「…そう…丁度こんな感じだった…」
ヒヅメ　「あ、なんでじいちゃんはあの沼に大人になっても通いつめてたんだろう？そんな辛い思いをした
　あの沼に」
ハマノ　「知ってるかい？馬の頭の良さを」
ヒヅメ　「まあ……」
ハマノ　「出先で飼い主が馬ソリで寝てしまっても、来た道を寸分違わず帰宅したという馬の話を、何度も
　聞いたことがある」
ヒヅメ　「すご」

ハマノ　「きっとサトルは、イナナキが帰ってくるかもしれないと思ってたのかもなあ」
ヒヅメ　「……」
イナナキ　「ハマちゃん」
ハマノ　「ハマちゃん？」
イナナキ　「私が何をすべきか、なんとなくわかった気がする」
ヒヅメ　「え」
ハマノ　「君は……」
ヒヅメ　「も、もう行こう」
ハマノ　「あの時、私たちはひどく幼く、あまりにも無知だった。本当に申し訳ないことをしたと思って
　いる……」

照明：山台1段目全体明かりIN
音響：『ドローンが飛ぶ音』IN　ハマノ、ヒヅメ、イナナキはハケる。

5　脅やかされる町

農協の人下手から入ってくる。ドローンを使って農薬を散布している。
上手から下校中の小学生が2人やってくる。

小学生1　「あ！ヘリコプターだ！」
小学生2　「こんにちは！」
農協の人　「こんにちは～」

小学生１　「あのヘリコプターおじさんが　そうじゅう　してるの？」
農協の人　「そうだよ～ヘリコプターっていうかドローンね」
小学生２　「おじさん！ひるまから何で遊んでるの？」
小学生１　「おしごとしないとダメだよ！」
農協の人　「これがお仕事なんだよ～」
小学生２　「え！？遊んでるんじゃないの!?」
小学生１　「ぜったい遊んでるじゃん！はたらきなよ！」
農協の人　「今ねえ、農薬を散布してるんだよ～」
小学生２　「のうやくさんぷ？」
小学生１　「なんだそれ！」
農協の人　「このお仕事をしないとね、農家の人がせっかく育てた大切な農作物を、カメムシとかが食べちゃうんだよ～」
小学生２　「カメムシ！？」
小学生１　「カメムシを殺してるの？」
農協の人　「殺してるんだよ～」
小学生２　「ひどい！かわいそう！」
小学生１　「おじさんサイテー！はたらきなよ！」

音響：『ドローン大破』ＩＮ

農協の人　「いや、だからこれが仕事だから…こらっ！やめなさいっ！あ～～～～！」

農作業用ドローンぶつかって大破する（異常なほど）

小学生１　「…いこ！」
小学生２　「うん！おじさん、明日からちゃんと　はたらくんだよ？」

小学生２名、ハケる。
立ち尽くす農協の人。そこへフクちゃんが上手からチャリでやってくる。
音響：おどろおどろしい音楽『ＩＮ（以降Ｐ１４７まで継続）

フク　「シューッシュッシュッシュ」
農協の人　「これがっ！僕の仕事なんだっ！（目が合う２人）」

音響：『目が合う音01』ＩＮ

フク　「シューッシュッシュッシュ」
農協の人　「…シューッシュッシュッシュ」

フクちゃん（上手へ）と農協の人（下手へ）ハケていく。
同時にさっきの小学生２人下手から入ってくる。

小学生１　「あんな遊んでるみたいなしごと、あるんだね～！」
小学生２　「ね！夢みたいなはなしだね！」

フクちゃん、ハケた方向（上手）からすぐ入ってくる。

小学生１　「あ！フクダしょうてん！」

小学生2　「ちゃんと はたらいてるぅ～?」

フクちゃんと小学生2の目が合う。

音響：『目が合う音02』ＩＮ

小学生2　「シューッシュッシュッシュ」

小学生1　「どうしたの?」

小学生2と小学生1の目が合う。

音響：『目が合う音03』ＩＮ

小学生1　「シューッシュッシュッシュ」

フク・小学生1・2　「シューッシュッシュッシュ」

シュッシュ言いながらフク下手・小学生上手へハケていく。

農協の人上手から入ってくる。続けてタヅナが農作業の格好で入ってくる。

タヅナ　「大丈夫ですか～?なんかすごい音しましたけど?」

農協の人　「シューッシュッシュッシュ」

タヅナ　「いやあ、すみません、ほったらかしで…」

農協の人　「シューッシュッシュッシュ」

タヅナ　「実は父が昨晩倒れてしまいまして…」

農協の人　「シューッシュッシュッシュ」

タヅナ　「いやあ、お医者さんには長くはないって言われてしまいました。びっくりですよねえ」

農協の人　「シューッシュッシュッシュ」

タヅナ　なかなか目が合わない2人。

「父が言ったんです『タヅナ、米、頼む』って。それからバタッと倒れて、死んだか?と思ったんですが、寝ているようで、それからずっと目を覚ましません。昏睡状態ってやつですね」

農協の人　「シューッシュッシュッシュ…(ちょっと元気なく)」

タヅナ　「でも、父の最期の頼みなので、私は田んぼを守ります」

農協の人　「シュシューシュ、シュッシュー」

タヅナ　「え?最期の頼みだなんて縁起でもないって?ハハ、ありがとうございます」

農協の人　「シュシュ～」

タヅナ　「農協さんも、会いたい人には、会えるうちに会っておいた方がいいですよ」

農協の人　「シュッシュッシュ」

タヅナ　「そうですね!まだ死ぬと決まったわけじゃありませんし、すみませんなんだか偉そうに!」

目が合う。

音響：『目が合う音04』ＩＮ

タヅナ　「シューッシュッシュッシュ(タヅナと農協の人、それぞれハケていく。)」

音響：『おどろおどろしい音楽』Ｆ・Ｏ

照明：全体明かりと沼の明かり。

6　過去改変

沼。イナナキとヒヅメが走ってやってくる。

ヒヅメ　「ちょっと、イナナキ、待って！」
イナナキ　「大丈夫か？」
ヒヅメ　「早いな、足が」
イナナキ　「馬だから」
ヒヅメ　「馬なら乗せてよ！」
イナナキ　「ヒヅメ、サトルのところに行こう」
ヒヅメ　「じいちゃん？じいちゃん今病院だよ」
イナナキ　「私はサトルの後悔を払拭するために甦ったのかもしれない」
ヒヅメ　「それがイナナキのすべきことってこと？」
イナナキ　「サトルに会いに行こう」
ヒヅメ　「沼に戻ってきちゃってんじゃん！」
イナナキ　「違う。行くんだよ。サトルが元気だった頃に」
ヒヅメ　「はい？？？？」
イナナキ　「この底無し沼は、過去に繋がってる」
ヒヅメ　「ちょっとイナナキさん？何をおっしゃってるのかさっぱりなんですが…」
イナナキ　「この沼は時空を超えるのだ！」
ヒヅメ　「過去に戻れるの！？タイムスリップ!?」
イナナキ　「正確には『戻る』じゃなくて『行く』だな」

ヒヅメ　「えええええ！やば！どうやって！？なんかそういうダイヤルとかあるの!?日付設定して～みたいな」
イナナキ　「ないよ！デロリアンじゃないんだから！」
ヒヅメ　「なんで馬がバックトゥザフューチャー知ってんだよ！」
イナナキ　「イメージするんだ！強く！例えば『しずかちゃんちのお風呂！』みたいな」
ヒヅメ　「なるほど！どこでもドア方式だな！」
イナナキ　「そういうこと！」
ヒヅメ　「で、それから！？」
イナナキ　「飛び込む！」
ヒヅメ　「沼に！？」
イナナキ　「沼に！」
ヒヅメ　「私も！？」
イナナキ　「私も！」
ヒヅメ　「やだ～！！！こええ～！！！」
イナナキ　「ヒヅメ！私を信じろ！」
ヒヅメ　「うーん、わかったよ。いつをイメージしたらいいの！」
イナナキ　「サトルが沼に飛び込む前、だ」
ヒヅメ　「いや知らん知らん！何年前だよ！私どころかお母さんも生まれてないじゃん！」
イナナキ　「ヒヅメ！イメージが大切だ！」
ヒヅメ　「う～～～～オッケー！！」
イナナキ　「行くぞ！（二人走り出す）」

音響『スローになる』ＩＮ

ヒヅメ　「あ！思い出した！」

イナナキ「なにを！」
ヒヅメ「りさちゃんグループ！」
イナナキ「ああ！…ええ！？」
ヒヅメ「あれすっごい屈辱だったなあ～！」
イナナキ「ヒヅメえ！イメージしろお！」

音響『スロー解除』ＩＮ→『２人飛び込む』ＩＮ→『全力少女』ＩＮ
照明：音の『全力少女』ＩＮで照明もセピアにチェンジ
小学生４人（小ヒヅメ・ミク・ユメ・カコ）出てくる。ラジカセ持ってくる。
音響：『全力少女』、Ｃ．Ｏ

カコ「とめま～す」
三人「……」
カコ「ん～。振り、まちがえてるよね？自覚ある人？」
ミク「ヒヅメちゃん」
小ヒヅメ「えっ、わたし？」
カコ「はあ～…」
ユメ「自分で気づいてないんだ」
ミク「ミク、いつも言ってるじゃん。ここの後は、こう！でしょ」
小ヒヅメ「え、でも、カコちゃんのその前のコレが「拍おくれてると思うんだけど」
カコ「ていうかさ！なんかバランス？がよくないと思う」
小ヒヅメ「バランスって？」
カコ「わたしたちって４人じゃん？ももクロって６人じゃん」
ミク「あ～メンバー追加する？」

小ヒヅメ「え、せっかく立ち位置覚えてきたのに…」
カコ「あ！そういえばリサちゃんグループが入りたいって言ってた！」
小ヒヅメ「え、でもさ、リサちゃんグループって３人じゃん？」
ミク「てことは…７人だから、一人余っちゃうか～」
ユメ「じゃあさ！オーディションやろうよ！」
カコ「ユメちゃん！天才！？」
ミク「めっちゃいいじゃんそれ」
小ヒヅメ「……」
カコ「今日はもうやめよ～」
ユメ「ミクちゃんいっしょにかえろー」

照明：下手白幕付近プラスで明かり（ヒヅメとイナナキがいる）
ミク・ユメ・カコはハケる。
小ヒヅメは一人振り入れの練習をする。

ヒヅメ「やば～！私だ！！！」
イナナキ「シ～ッ！！！」
ヒヅメ「すごい！本当に過去にきた！」
イナナキ「これたけど！ヒヅメが直前に変なこと言うから違う時代にきちゃったよ！」
ヒヅメ「見て！昔の私！健気～！！」
イナナキ「沼に戻ろう、ヒヅメ」
ヒヅメ「何さ、別にいいじゃん、減るもんじゃないし！」
イナナキ「ヒヅメ、タイムトラベルの鉄則って知ってるか？」
ヒヅメ「何それ、そんなのあるの」

イナナキ　「『自分自身と会ってはいけない』だ！」
ヒヅメ　「自分自身に？なんで？」
イナナキ　「タイムパラドックスだよ。未来に影響がでる！」
ヒヅメ　「でも未来を変えるために過去に来たんでしょ！？」
イナナキ　「変わりすぎると危ないってことだ！沼に戻ってもう一度やり直そう」
ヒヅメ　「……うーん」

踊ってる小ヒヅメに対しコールを打ってしまうヒヅメ。

ヒヅメ　「ヒ～ヅメ！ヒ～ヅメ！」
イナナキ　「おい！」
ヒヅメ　「おまえがいちばん！ヒヅメ～！」

イナナキに無理矢理連れてかれて下手白幕裏にハケるヒヅメ。

小ヒヅメ　「……？」

小ヒヅメは怪訝な顔。少し踊ってハケていく。

7　ウワバミとの対決

照明：現代の沼にチェンジ
音響：『ブクブクバシャー』ＩＮ
現代。沼から出てくるヒヅメとイナナキ。

ヒヅメ　「ぷはあ！はあ…はあ…」
イナナキ　「はあ…よかった！存在してる…。ヒヅメ、自分が誰かわかるか？」
ヒヅメ　「私は巻野ヒヅメ…」
イナナキ　「私は？」
ヒヅメ　「イナナキ。じいちゃんが飼ってた馬の化身でしょ」
イナナキ　「よかった…未来に影響はなかったようだな…」
ヒヅメ　「そうか…あの時聞こえたあの声は、未来の私の声だったんだ！」
イナナキ　「え？ああ、記憶が書き換えられたんだな…余計なことするから…」

ふと、歌の振りを踊っているヒヅメ。

イナナキ　「…どうした？」
ヒヅメ　「え？何が？」
イナナキ　「…なんで踊っている？」
ヒヅメ　「いや、新曲の振り、入ってなくて、ごめん、大事なときに」
イナナキ　「新曲の振り？」
ヒヅメ　「そうか、まさか未来の自分の声がきっかけで、アイドルになるとは…」
イナナキ　「……」
ヒヅメ　「……（踊ってる）」

イナナキ　「…ヒヅメ、今なんて？」
ヒヅメ　「新曲の振り、入ってなくて」
イナナキ　「そのあと！」
ヒヅメ　「まさか未来の自分の声がきっかけでアイドルになるとは」
イナナキ　「ヒヅメ、お前はアイドルじゃない。ただの大学生のはずだ」
ヒヅメ　「は？何言ってんの。そうだけど、ちゃんとやってるよ、アイドルも！」
イナナキ　「アイドルになっとる～～～～～～！」
ヒヅメ　「どうしたのイナナキ、私は最初からアイドルじゃん！？まあ地下アイドルだけど！」
イナナキ　「未来が変わっちゃてるよ！」
ヒヅメ　「え？」
イナナキ　「沼に入る前のヒヅメは、『小学生の時にアイドルになりたかったフツーの大学生』だったの！それが過去のちょっとの接触で、『アイドル活動をしている大学生』になっちゃったよ！」
ヒヅメ　「ええ？私は昔からずっとアイドルやってたけど…」
イナナキ　「現代に帰ってきた時点で記憶が書き換えられたんだろうな」
ヒヅメ　「変なの。イナナキは？」
イナナキ　「私は今の時代もさっきの時代でも、そもそも死んでるから何も変わらない」
ヒヅメ　「ええ～頭こんがらがってきた～！でもまあいいか！私アイドルだし！」
イナナキ　「心なしか自己肯定感も高まってる！」

そこにフクちゃんがチャリでやってくる。
音響：『おどろおどろしい音楽』ＩＮ（以降Ｐ１５８まで継続）
照明：徐々に夕方っぽくなていく

フク　「シューッシュッシュッシュ！」

ヒヅメ　「あれ、フクちゃん！」
フク　「シューッシュッシュッシュ！」
イナナキ　「…待て！ヒヅメ！」
ヒヅメ　「え？」

ヒヅメとイナナキは上手白幕裏に隠れる。
記者が下手から入ってくる。

記者　「はあ…はあ…ここが底無し沼か…」
フク　「シューッシュッシュッシュ」
記者　「あ、すみませ～ん！私、どさんこ新聞ＷＥＢの者ですけど」

記者は名刺を取り出してフクちゃんに渡そうとして目が合う。
音響：『目が合う音05』ＩＮ

記者　「シューッシュッシュッシュ」
フク　「シューッシュッシュッシュ」

ハケていく2人。

ヒヅメ　「なにあれ？なんかシュッシュ言ってたけど」
イナナキ　「睨まれると蛇にされるのか」
ヒヅメ　「蛇！？え、私なんか未来変えちゃった？」
イナナキ　「いや違う…これは…」

ウワバミの声がする。

ウワバミ　「真っ黒蛇がやってくる～お腹を空かせてやってくる～」
ヒヅメ　「何！？」
イナナキ　「この声は」

ウワバミ、沼から出てくる。

ウワバミ　「真っ黒蛇がやってくる～お腹を空かせてやってくる～」
ヒヅメ　「誰！？」
ウワバミ　「我が名は、沼の底より甦りし、黒蛇の化身、ウワバミ。シューッシュッシュッシュ」
ヒヅメ　「変態だ！」
イナナキ　「さっきの蛇化はお前の仕業だな！」
ウワバミ　「人間様とタイムトラベルごっこかい？仔馬ちゃん」
イナナキ　「私を追ってきたのか！このストーカー！」
ウワバミ　「私が欲しいのはアンタじゃなくてその刮削刀だよ」
ヒヅメ　「イナナキ！誰なのこの変態！」
イナナキ　「説明は後だ！鎌型蹄刀に気をつけろ！刺されるとコントロールされてしまうぞ！」
ヒヅメ　「鎌型蹄刀って！？」
イナナキ　「あの鎌みたいなやつ！」
ウワバミ　「これ」
ヒヅメ　「はあああ？沼から復活する奴らってなんでみんな厨二っぽいんだよ！」
ウワバミ　「キーキーやかましいお嬢ちゃんだねシューッシュッシュッシュ」

ヒヅメ　「ひええ～！！！」
ウワバミ　「邪魔するんじゃないよ馬糞野郎～！」
イナナキ　「こんの～～～10万馬力～！！！」

音響：『十万馬力』ＩＮ
刮削刀に跳ね返されるウワバミ。

ウワバミ　「うゲェーッ」
ヒヅメ　「10万馬力！なんかポケモンっぽい！」
イナナキ　「お前の目的はなんなのだ！ウワバミ！」
ウワバミ　「フン、そんなの貴様に教える筋合いなどないわシューッシュッシュッシュ。私の目的はこの世を黒蛇の世界にすることだ…誰も彼も黒蛇に仕立て、この世界を漆黒の闇に染め上げるのだ！」
ヒヅメ　「めっちゃ喋るじゃん」
イナナキ　「お前の思い通りにはさせない！」
ヒヅメ　「いけ！イナナキ！10万馬力だ！」
イナナキ　「ピィ～カァ～…」
ウワバミ　「いでよ！黒蛇たちよ！！」

ヒヅメに襲いかかるウワバミ。イナナキが阻止する。
音響：『刀を阻止』ＩＮ

舞台の上手奥と下手奥から蛇になった町民が出てくる。（出れるだけの人が全員出てくる）みんな黒い仮面をつけている。ふらふら迫ってくる。

全員シューシュー言っている。

イナナキ「これは……」
ヒヅメ「みんな、蛇にされちゃってる……」
ウワバミ「真っ黒蛇がやってくる～お腹を空かせてやってくる～」
イナナキ「ヒヅメ！目を見るな！蛇にされる！」
ヒヅメ「イナナキ～！どうしよう～！」

メロディー橋（鉄琴の生演奏）を鳴らす音が聞こえる。
音響：『おどろおどろしい音楽』C・O

イナナキ「ん？何か聞こえる！」
ウワバミ「この音は……」
ヒヅメ「メロディー橋！久々に聞いた！」
イナナキ「蛇たちの動きが止まったぞ」
ウワバミ「うぅ……っ！」
ヒヅメ「何！？どうした！？」
ウワバミ「エ……エモい！」

メロディー橋（鉄琴）を鳴らす音、終わる。

ウワバミ「ふう、びっくりした……」
ヒヅメ「どうしたの？」
ウワバミ「いやちょっと、なんかもう帰らなきゃ行けない時間か…って思っちゃって」

ヒヅメ「あーわかる」
ウワバミ「よし、気を取り直して……真っ黒蛇がやってくる～お腹を空かせてやってくる～」

音響：おどろおどろしい音楽』C・I
再び動き出す蛇たち。

ヒヅメ「なんなんだ！」
イナナキ「ヒヅメ！エモくさせるんだ！」
ヒヅメ「はい！？」
イナナキ「ウワバミは…エモーショナルな気分になると怯む！」
ヒヅメ「なんだその弱点！」
イナナキ「早く！ヒヅメならできる！アイドルだろ！」

照明：舞台手前中央明かりだけになる
音響：『ゆうやけこやけNUMAremix』IN
歌が呪いを解いていく。みんな巻き込み歌って踊る。壮大なスケールになって終わる。同時にウワバミ以外の蛇たち手を振りながらハケていく。
照明：曲終わりで現代沼（暗い夕方）に復帰

ウワバミ「ウウウ…エモすぎる！！（倒れ込む）」
イナナキ「やった！」
ヒヅメ「みんな帰っていった！」
ウワバミ「もっと…みんなと…遊びたいだけなのに…」
ヒヅメ「なんか、哀れになってきたな…」

ウワバミ　「なーんてな」

ウワバミに背後から刺されるイナナキ。

音響：『刺されるイナナキ』ＩＮ

ウワバミ　「遊びは終わりだ…イナナキ」

音響：『鎌型蹄刀を抜く』ＩＮ

イナナキ、上手前に倒れる。

ヒヅメ　「イナナキ！！！！」

ウワバミ　「シュ～ッシュッシュッシュ。そこで走馬灯でも見てるんだな」

ヒヅメはイナナキが落とした刮削刀を拾う。

ウワバミ　「それをこっちによこしなさい。お嬢ちゃん」

ヒヅメ　「お前……友達いないんだろ！！！」

ウワバミ　「えっ？」

ヒヅメ　「友達いないんだ！だからそうやって！イナナキに固執するんだ！」

ウワバミ　「違うね。私はその刮削刀が…」

ヒヅメ　「違くないね！あんた大切な人とかいないんだろ！どうせ！」

ウワバミ　「違う」

ヒヅメ　「家族とかいないんだ！かわいそう！」

ウワバミ　「違う」

ヒヅメ　「きっと一人寂しく沼の中で溺れて死んだんだ！蛇のくせに！」

ウワバミ　「違う！私は…」

ヒヅメ　「あ、お母さん迎えにきてるよ」

ウワバミ　「えっ！？」

ヒヅメ　「隙ありぃいいい！！！」

ヒヅメ、ウワバミを刺す。

音響：『ウワバミを刺す』＆『魔力を吸い取る音』ＩＮ

照明：逆光

ウワバミ　「あああああ！！！」

ヒヅメ　「ばーか！ばーか！」

ウワバミ　「力がぁ！魔力が…吸い取られるぅううう！」

音響：『刮削刀を抜く』ＩＮ

照明：逆光収まり、暗めの夕方に復帰

ウワバミ　「お…おかあ…さん……」

沼の中に飛び込みハケるウワバミ。

イナナキ　「ヒヅメ…（瀕死っぽい）」

音響：『ゆうやけこやけ防災無線』Ｆ・Ｉ

ヒヅメ　「イナナキ！大丈夫！？蛇になってない！？」
イナナキ　「今のところ馬だ」
ヒヅメ　「死なないで！イナナキ！」
イナナキ　「死なない…というか、最初から死んでるし…」
ヒヅメ　「よかった～！いや、いいのか？」
イナナキ　「ヒヅメ、あとは頼む…沼に飛び込むサトルを止めてくれ…」
ヒヅメ　「…一緒に行こう！」
イナナキ　「私は行けない。一人で行くんだ…これ（刮削刀）を持って」
ヒヅメ　「でもさあ！過去を変えたら、今あるこの記憶はどうなっちゃうの！？」
イナナキ　「……」
ヒヅメ　「じいちゃんが沼にとびこまないってことは……」
イナナキ　「私は元々この時代に生きているものじゃない。心配するな」
ヒヅメ　「……」
イナナキ　「次はちゃんとイメージするんだぞ」
ヒヅメ　「……」
ヒヅメ　「勝手に現れたのそっちじゃん！なんかずるくない！？」
イナナキ　「…すまない」
ヒヅメ　「…まあ別にいいけど。私アイドルだし！（走り出し、沼に飛び込む）」

音響：『飛び込む音』ＩＮ

イナナキ　「ヒヅメ、ありがとう」

音響：『ゆうやけこやけ防災無線』煽ってＦ．Ｏ

照明：暗めの転換明かりにＦ．Ｉ
イナナキ、ハケる。

8　二度目の過去改変

過去（1960年）10歳のサトル、ハマノ板付き。

小サトル　「たからさがし？」

照明：セピアにチェンジ
音響：『タモで探る音』Ｆ．Ｉ

小ハマノ　「知ってるかサトル、この沼のでんせつ」
小サトル　「ああ、おうごん の かっさくとう だべ？」
小ハマノ　「この沼の そこ にあるはずだ」
小サトル　「おまえ信じてんの？」
小ハマノ　「うん」
小サトル　「はんかくせ。あんなのウソにきまってるべや」
小ハマノ　「そう思うんなら、そこで指くわえて見とけ」
小サトル　「ハマちゃん、やめとけって、そこなし沼だぞ。そもそもそこがねえんだから見つかるわけねえべ」
小ハマノ　「ロマンのねえ男だなあ、そんなのわかんねえ。見つけたらきっとおおがねもちだぞ」
小サトル　「……」

小ハマノ「(タモのなかみを見て)なんもん入ってねえ」
小サトル「…ハマちゃん、それって、見つけたら こううんき 買えるべか?」
小ハマノ「ああ、そんなもん100台は買えるんでねえか?家だって夢じゃねえ」

音響:馬の鳴き声02』IN

小ハマノ「出てこ〜い。かっさくと〜う」
小サトル「ハマちゃん、俺にまかせろ」
小ハマノ「え?」
小サトル「そのおうごん の かっさくとう、俺が見つける」
小ハマノ「え?何してんだ?」
小サトル「いいか!よく見とけ!男の いきざま を!」
小ハマノ「おい?やめろサトル!」
小サトル「俺はのうかのむすこ!巻野サトル!せんぞだいだい続くひゃくしょうだましい 見せつけてくれる わ〜!!!」

音響:『バシャー』IN ヒヅメが沼から勢いよく出てくる

ヒヅメ「ぶはああ」
サト・ハマ「わあああああああ」
ヒヅメ「ゲホゲホ!オエエ!」
サト・ハマ「バケモンだ〜〜〜〜〜!!!!」
ヒヅメ「じいちゃん!?」
小サトル「え?」

ヒヅメ「じゃなくて!サトル…くん?」
小サトル「なんで俺の名前?」
小ハマノ「何してるんですか!」
ヒヅメ「お、泳いでた!」
小ハマノ「そこなし沼で!?」
ヒヅメ「そう!いや〜でも危なかった〜!死ぬとこだった〜!大人でも足つかないよ!こりゃ本当に底無し沼だ〜!」
小サトル「こえ〜」
小ハマノ「あ!!それ!!もしかして、おうごん の かっさくとう!?」
ヒヅメ「ああ…これあげる」
小ハマノ「えっ!?いいんですか!?やった〜!!(自慢気に下手へハケていく)」
小サトル「あ!ずるいぞ!ハマちゃん!」

音響:『馬の鳴き声04』IN

ヒヅメ「(馬を見て)イナナキ…」
小サトル「…会ったこと、ありましたっけ?」
ヒヅメ「まあ…」
小サトル「売られちゃうんです。イナナキ」
ヒヅメ「そうなんだ」
小サトル「でもあの かっさくとう があれば大丈夫ですよね!?」
ヒヅメ「うーん、どうだろ…でももしイナナキが売られちゃったとしても、最後まで仲良くしてあげて」
小サトル「でも…」
ヒヅメ「きっとイナナキも幸せだったと思う!」

音響：『別れの曲』Ｆ・Ｉ

小サトル　「うん！」

音響：『馬の鳴き声05』ＩＮ　手綱が引っ張られる。

小サトル　「うわ！イナナキ、待って！…ありがとうございました！」

引っ張られてハケていく小サトル。

それを見送るヒヅメ。沼の前まで来て止まる。

ヒヅメ　「…じいちゃ～ん！イナナキ～！元気でね～！（飛び込む）」

音響：『ヒヅメ最後の飛び込み』ＩＮ

照明：セピアから明るい幻想的な照明になる。両サイド白幕裏の明かりＩＮ

大人サトル（上手幕裏）と（下手幕裏）小ヒヅメがいる

サトル　「ヒヅメ…昔、馬はな、家族同然だったんだよ」

小ヒヅメ　「かぞく？」

サトル　「昔の家はなあ、必ず茶の間と便所の間に馬小屋があってな。小便行く時じいちゃんいつも馬のようすを見てたよ」

小ヒヅメ　「ふ～ん」

サトル　「（小ヒヅメの眉間を指差す）」

小ヒヅメ　「んえ？なにー？」

サトル　「馬ってよ、ここに模様あるべ」

小ヒヅメ　「あーもよう。あるね。白いやつ」

サトル　「うん白いやつ。あれ、なんていうか知ってるか？」

小ヒヅメ　「知らない！」

サトル　「はっはっは…ヒヅメ、じいちゃんもう行くわ」

小ヒヅメ　「えっ？…どこに？」

サトル　「ヒヅメ」

小ヒヅメ　「なに？」

サトル　「ヒヅメの好きなことやればいいから」

照明：上手白幕裏の明かり消える

小ヒヅメ　「まってよ！じいちゃんどこいくの！行かないで！じぃーちゃーーん！」

音響：『別れの曲』Ｆ・Ｏ

照明：小ヒヅメが叫ぶ中、暗転していく→完全暗転

エピローグ

音響：暗転の中『沼のほとり-夜』Ｆ・Ｉ

照明：照明もゆっくりIN（夜の沼のほとりの明かり）

現代の沼のほとり。夜になっている。ヒヅメが倒れている。（暗転板付き）

ヒヅメ　「ん～…」

上体を起こし、辺りを見渡すヒヅメ。

ヒヅメ　「……」

客席後方から声がする。

懐中電灯を照らしながら舞台に向かってくる母タヅナ。

タヅナ　「ヒヅメー」

ヒヅメ　「……」

声に反応し起き上がるヒヅメ。

ヒヅメ　「お母さん？」

タヅナ　「いや～本当にいた…はあ、疲れた」

ヒヅメ　「こんなところで何してんの？」

タヅメ　「はあ？いや、こっちのセリフなんだけど…」

ヒヅメ　「え？」

タヅナ　「こんなところで何してんのさ」

ヒヅメ　「……あれ、なんでだっけ？」

タヅナ　「は？」

ヒヅメ　「どうしてここにいるってわかったの？」

タヅナ　「なんか、おじいちゃんが」

ヒヅメ　「じいちゃん？」

タヅナ　「うん、じいちゃんが、ここにいるんじゃないかって。びっくりしたわ、あの人ずっと寝てたのにさ、急にはっきりした物言いで喋るから、気押されちゃって。探してくるわーって。したっけあんた本当にいるんだもの」

ヒヅメの顔面に懐中電灯を当てるタヅナ。

タヅナ　「あんた……なんで泣いてんの？」

ヒヅメ　「え、わかんない、なんでだろ、ははは」

タヅナ　「なに、こわいんだけど。どうしちゃったのさ」

ヒヅメ　「あはは……（見上げて）あ」

タヅナ　「？」

ヒヅメ、上を見上げながら立ち上がる。

ヒヅメ　「…見て、すっごい綺麗」

タヅナ　「…あ～本当だねえ」

音響：『KAREDARESO』IN

照明：舞台はゆっくりと暗転していき、星の輝く夜空になる。

おしまい

あとがき

今回創作した3つのラジオドラマは、帯広市のFM WING、室蘭市のFMびゅー、恵庭市のe-niwaでそれぞれ放送されたほか、2023年12月24日～2024年1月24日の間に道内22局のコミュニティFMで放送されました。

また、鷹栖町で制作された演劇「ヒヅメとイナナキと不思議な沼」は、2024年1月20日にたかすメロディーホールで上演され、子どもからお年寄りまで219人の方々にご観劇いただきました。

この間、取材にご協力いただいた皆様、地元の制作スタッフ・出演者の皆様、そして二人三脚で作品の完成までをサポートしていただいたFM WING、FMびゅー、e-niwa、劇団isonoの皆様にこの場をお借りして感謝申し上げます。ありがとうございました。

JAPAN LIVE YELL project in HOKKAIDO 2023
Meets HOKKAIDO
～まだ見ぬ北海道の物語～

事業報告書

2024年1月26日発行
発行　札幌演劇シーズン実行委員会
（JAPAN LIVE YELL project in HOKKAIDO 2023事務局）
〒064-0811札幌市中央区南11条西1丁目3-17ファミール中島公園1F
公益財団法人北海道演劇財団内
TEL. 011-520-0710
https://s-e-season.com/jlyp2023/

JAPAN LIVE YELL project in HOKKAIDO 2023